



2023 年度 拠点事業年次報告書

熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構
教授システム学教育実践力開発拠点

〒860-8555

熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

電話：096-342-2895

ウェブサイト：<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/sharing-hub/>

目次

目次.....	1
教育関係共同利用拠点の 7 つの取り組み	2
共同利用拠点事業①	3
共同利用拠点事業②	24
共同利用拠点事業③	34
共同利用拠点事業④	41
共同利用拠点事業⑤	49
共同利用拠点事業⑥	67
共同利用拠点事業⑦	75

教育関係共同利用拠点の 7 つの取り組み

本拠点は、教育関係共同利用拠点として認定されています。

拠点名称：教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点

共同利用分野：大学の職員（教員を含む）の組織的な研修等の実施機関

期間：令和 5 年度から 7 年度

教育関係共同利用拠点として、教授する力のうちの授業実践力（デリバリ）に対するノウハウを身に付けることに留まらず、デリバリの基盤となる授業設計力（デザイン）あるいはカリキュラム設計力を身に付けるための授業設計、教育評価、授業改善のための分析手法、改善手法等を体系化したオンライン教材、ワークショップ等の開発・提供といった活動を行っています。

延長が認められた令和 3 年度以降は、新たに FD 担当者向け履修証明プログラム、LT テクノロジーを学習するワークショップ等を追加した上で、7 つの取組として提供しています。

< 7 つの取り組み >

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「ID ポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD 研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 大学教員志望者のための教え方講座（教育改善スキル修得オンラインプログラム）
6. FD 担当教職員向け「FD 活動デザイン講座」
7. ポストコロナの教育と FD を強化するテクノロジー活用セミナーパッケージ

上記 7 つの取り組みは、本拠点内の各部門が協力し、運営しています。

共同利用拠点事業① 公開講座

本センターでは、インストラクショナル・デザインに関する
公開講座を各地で開催しています。

本年度の取り組みの概要

公開講座の内容を周知し受講者募集するウェブページ（<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/koukaikouza/>）の閲覧状況を把握できるアクセス解析ツールとして、昨年導入した Google アナリティクス のバージョンアップを行い、最新の Google アナリティクス 4（GA4）での計測を開始しました。

以下に示すデータは Google アナリティクス 4 からのものとなります。今後も、こうしたデータを参照し、参加者増加に資するウェブコンテンツ改善に活かす方向で進めてまいります。



図：インストラクショナルデザイン公開講座ウェブページ

表：インストラクショナルデザイン公開講座ページ訪問のきっかけ（参照元）
（2023 年 4 月-2024 年 3 月）

	ユーザー	新規ユーザー	ページビュー数	セッション	コンバージョン
検索エンジン	1, 510	1, 103	9, 425	2, 462	474
直接訪問	1, 447	1, 323	5, 272	2, 132	338
参照元サイト	529	418	1, 185	744	86
SNS	135	115	268	154	13
合計	3, 408	2, 959	16, 150	5, 630	911

※コンバージョンは、ページ内にある申込フォームへのリンククリック数

表：月毎のサイトへのアクセス数

月（2023 年）	ユーザー	新規ユーザー	ページビュー数	セッション	コンバージョン
4 月	124	40	166	145	0
5 月	155	38	249	196	5
6 月	131	30	193	162	11
7 月	206	56	346	283	38
8 月	738	515	1, 147	982	166
9 月	504	283	827	715	137
10 月	653	376	1, 006	903	160
11 月	632	296	1, 158	1, 020	212
12 月	248	78	382	337	70
1 月	277	93	407	359	84
2 月	181	61	237	214	15
3 月	162	49	230	201	18

※コンバージョンは、ページ内にある申込フォームへのリンククリック数

表：公開講座受講者募集に関する PR 施策

投稿日時	内容
2023 年 8 月 3 日	ウェブサイトお知らせ：2023 年度インストラクショナルデザイン公開講座入門編募集開始（参加申込について）
2023 年 8 月 9 日	ID マガジン：【ご案内】2023 年度 熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン入門編」の受講者募集のお知らせ
2023 年 8 月 10 日	Facebook ページ：2023 年度熊本大学公開講座インストラクショナルデザイン入門編募集開始しました！
2023 年 8 月 22 日	桐蔭学園トランジションセンターtulip メーリングリスト：2023 年度 熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン入門編」の申込受付中
2023 年 8 月 23 日	広島大学高等教育研究開発センターからのお知らせ：11 月 10～21 日開催 2023 年度 熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン入門編」のご案内
2023 年 9 月 27 日	researchmap プレスリリース：2023 年度 熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座＜入門編＞ いよいよ開講！（オンライン）
2023 年 9 月 28 日	広島大学高等教育研究開発センターからのお知らせ：熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座のご案内
2023 年 10 月 20 日	ウェブサイトお知らせ：2023 年度インストラクショナルデザイン公開講座応用編募集開始（参加申込について）
2023 年 10 月 20 日	ID マガジン：【ご案内】2023 年度 熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン応用編」の受講者募集のお知らせ

投稿日時	内容
2023 年 10 月 20 日	researchmap プレスリリース：2023 年度 熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座＜応用編＞ 募集開始！（オンライン）
2023 年 10 月 20 日	Facebook ページ：2023 年度熊本大学公開講座インストラクショナルデザイン応用編募集開始しました！
2023 年 10 月 24 日	桐蔭学園トランジションセンターtulip メーリングリスト：熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン」では、現在募集中の＜入門編＞に加えて、＜応用編＞の募集を開始
2023 年 10 月 25 日	広島大学高等教育研究開発センターからのお知らせ：12023 年度熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン＜応用編＞」の募集開始！
2023 年 11 月 2 日	桐蔭学園トランジションセンターtulip メーリングリスト：熊本大学公開講座「インストラクショナルデザイン」＜入門編＞はまもなくすべての日程の申込締切
2023 年 11 月 2 日	広島大学高等教育研究開発センターからのお知らせ：熊本大学インストラクショナルデザイン公開講座＜入門編＞ まもなく申込締切！



図：インストラクショナルデザイン公開講座受講者募集の Facebook ページ投稿

教育関係者、企業における研修・教育担当者、医療関係者、日本語教師等、教育・研修を担当する幅広い層を対象に、インストラクショナル・デザイン（以下、「ID」）を紹介・学ぶ機会を提供する公開講座を 2011 年より実施しています。講座は、ID の基礎用語 10 個を学び、ARCS モデルの活用事例をワークで学ぶ入門編、および入門編で学んだ ID 基礎用語をベー

スに、参加者同士のワークを中心に参加者自身の事例を改善し、ID を使う練習を徹底的に行う応用編から構成されています。

いずれの講座でも、事前事後学習では Moodle を使用しております。今年度は対面のワークショップについては入門編は Zoom による同期型のオンライン研修、応用編は Zoom による同期型オンライン研修と会場研修にて、事前事後学習は例年通り Moodle を使用して実施しました（入門編 5 回、応用編 3 回）。

◆入門編◆

講師：都竹茂樹、平岡斉士、天野慧、土屋理恵、宮下和子

学習目標：

- (1) ID の基礎用語 10 個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる（知的技能）
- (2) ARCS モデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる（知的技能）

概要：

e ラーニングでの自己学習や受講者同士のワークを通じて ID10 の基礎用語を学んでいきます。また、Zoom を使用したワークショップでは、10 個の基礎用語の中から ARCS モデルに絞り、講師が提示する教育事例に対する改善策の検討を受講者同士ワークで行っていきます。ID の道具をどのような場面でどのように活用できるか提示できるようになることを入門編の目標としています。

◆応用編◆

講師：鈴木克明

学習目標：

- ・ ID の基礎用語 10 個のうち 1 つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる（知的技能）

概要：

入門編で学んだ ID 基礎用語をベースに、応用編では参加者同士のワークを中心に構成し、ID を使う練習を徹底的に行います。みなさんが取り組まれている教育事例について、ID を用いて改善案を提示できることを応用編の目標としています。

※昨年度までに入門編の事後テストに合格し修了認定された方や、他の場で ID を学習し入門編の学習目標を達成している方等は、応用編から受講可能です。ただし、その際には、別途ご案内する応用編の前提課題へ取り組み、合格基準を満たす必要があります。

各地会場の参加者数

【入門編】 全受講人数：159 名

各回共通：募集人数：40 名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5 時間

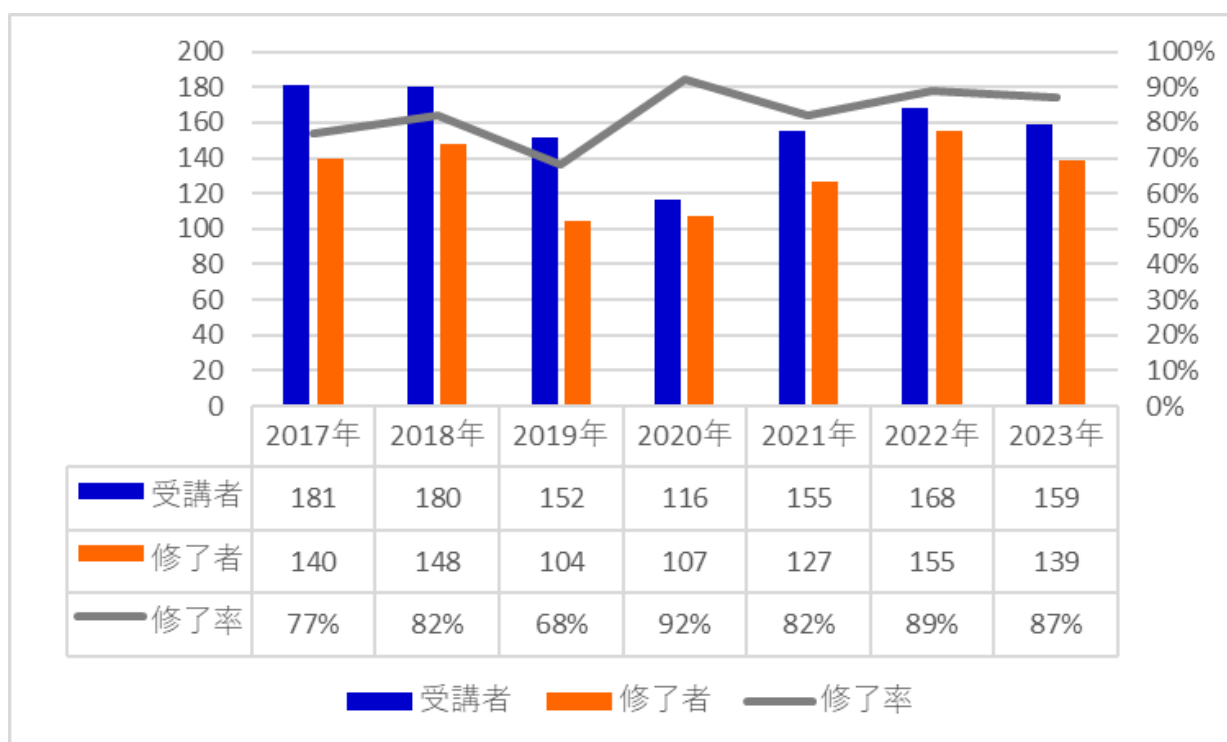
No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	入門編	11/10（金）	Zoom	38 名
2	入門編	11/13（月）	Zoom	27 名
3	入門編	11/14（火）	Zoom	35 名
4	入門編	11/20（月）	Zoom	24 名
5	入門編	11/21（火）	Zoom	35 名

【応用編】 全受講人数：51 名

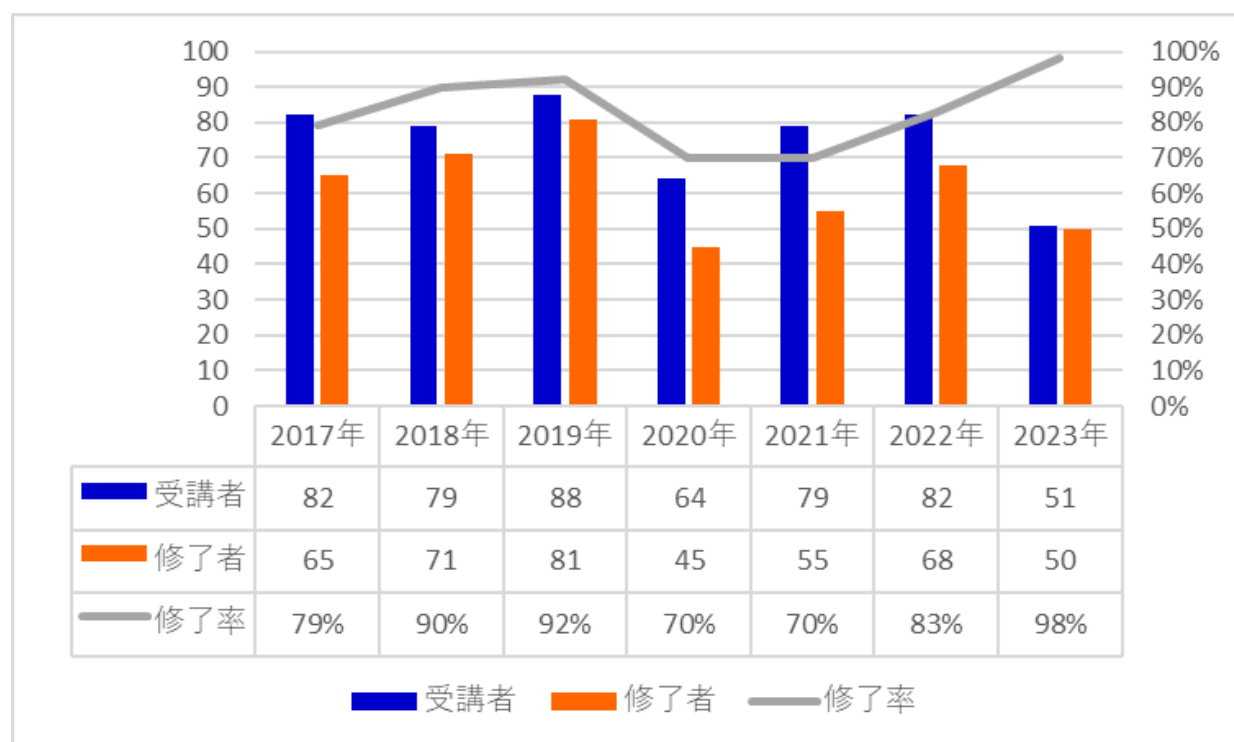
各回共通：募集人数：40 名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5 時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	応用編	1/21（日）	東京	12 名
2	応用編	1/27（土）	Zoom	27 名
3	応用編	2/17（土）	大阪	51 名

入門編・応用編修了率の推移（レベル 2）

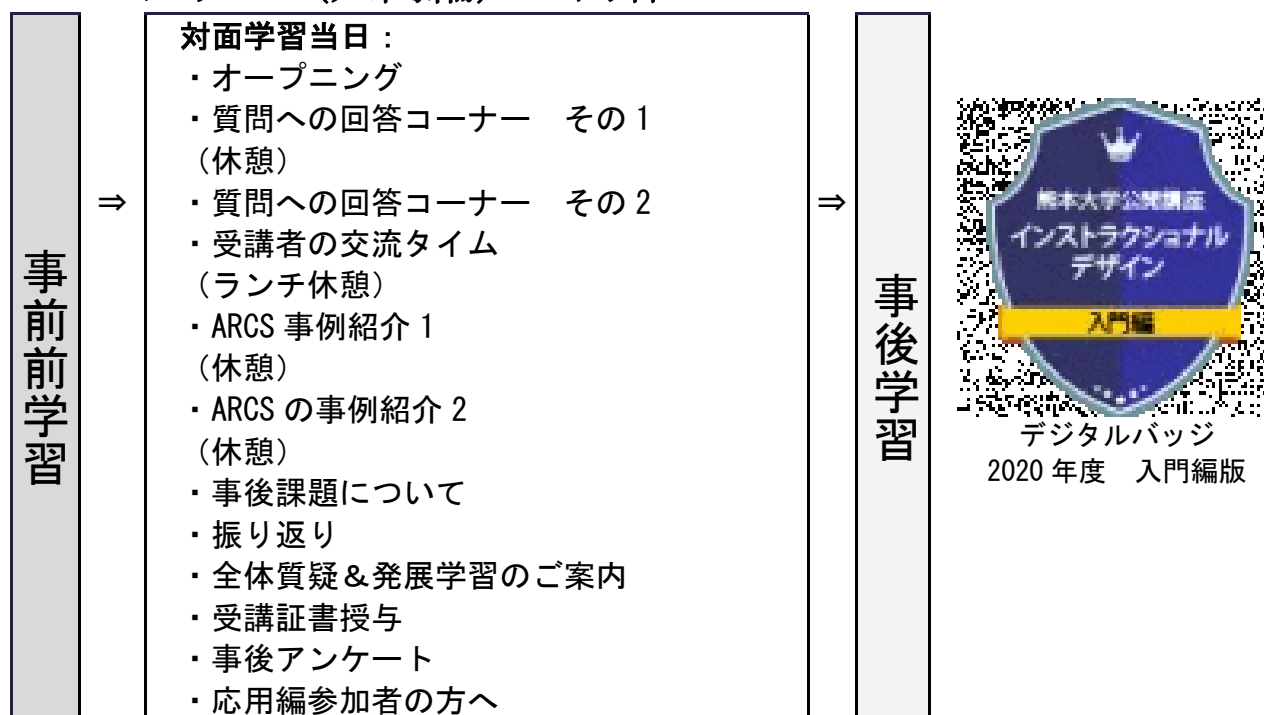


図：入門編受講者数に対する修了者数の推移

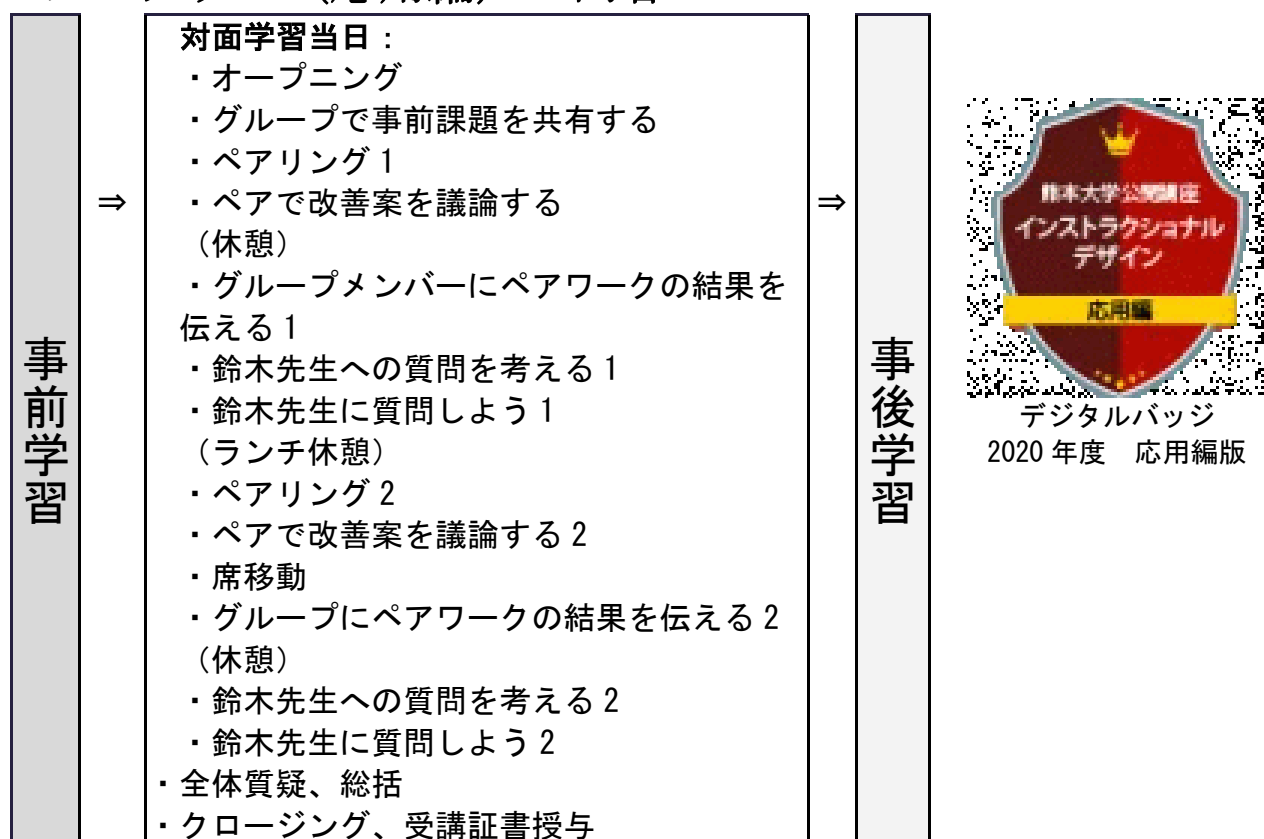


図：応用編受講者数に対する修了者数の推移

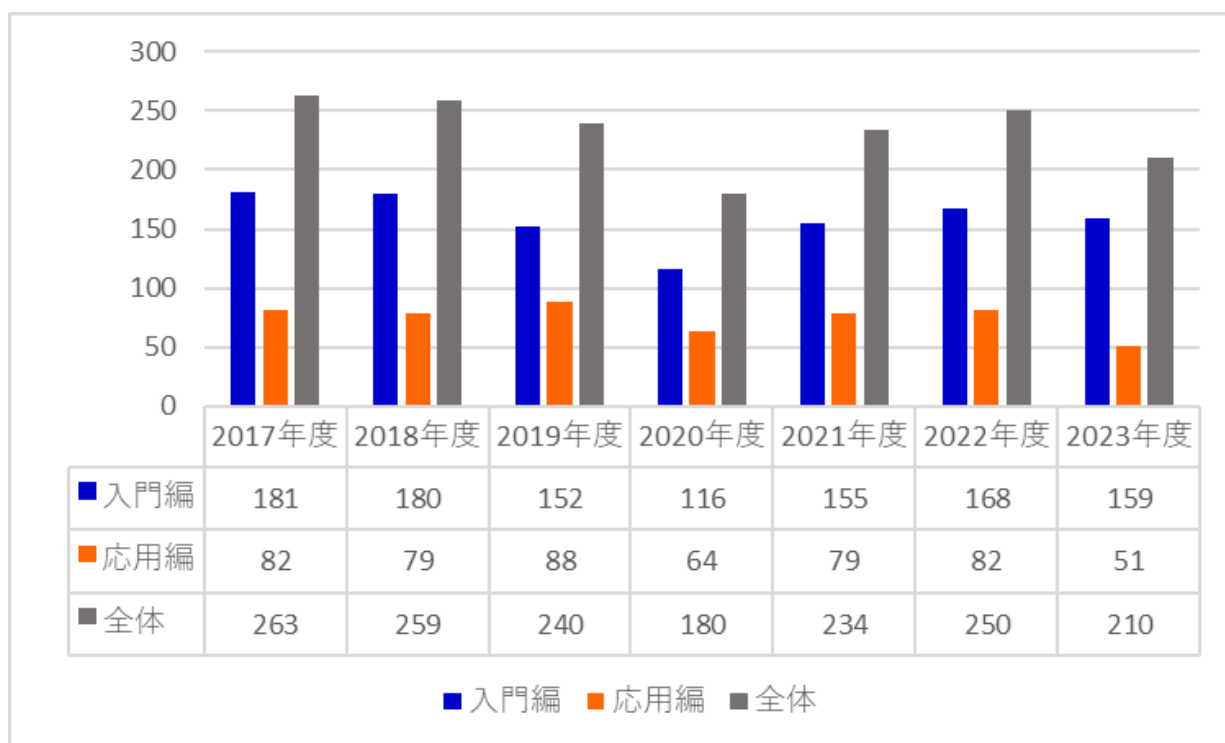
プログラム（入門編）の内容



プログラム（応用編）の内容



入門編・応用編参加者数推移



図：受講者数推移（2017 年度から 2023 年度）

受講後アンケートの結果（レベル 2：主観的評価）

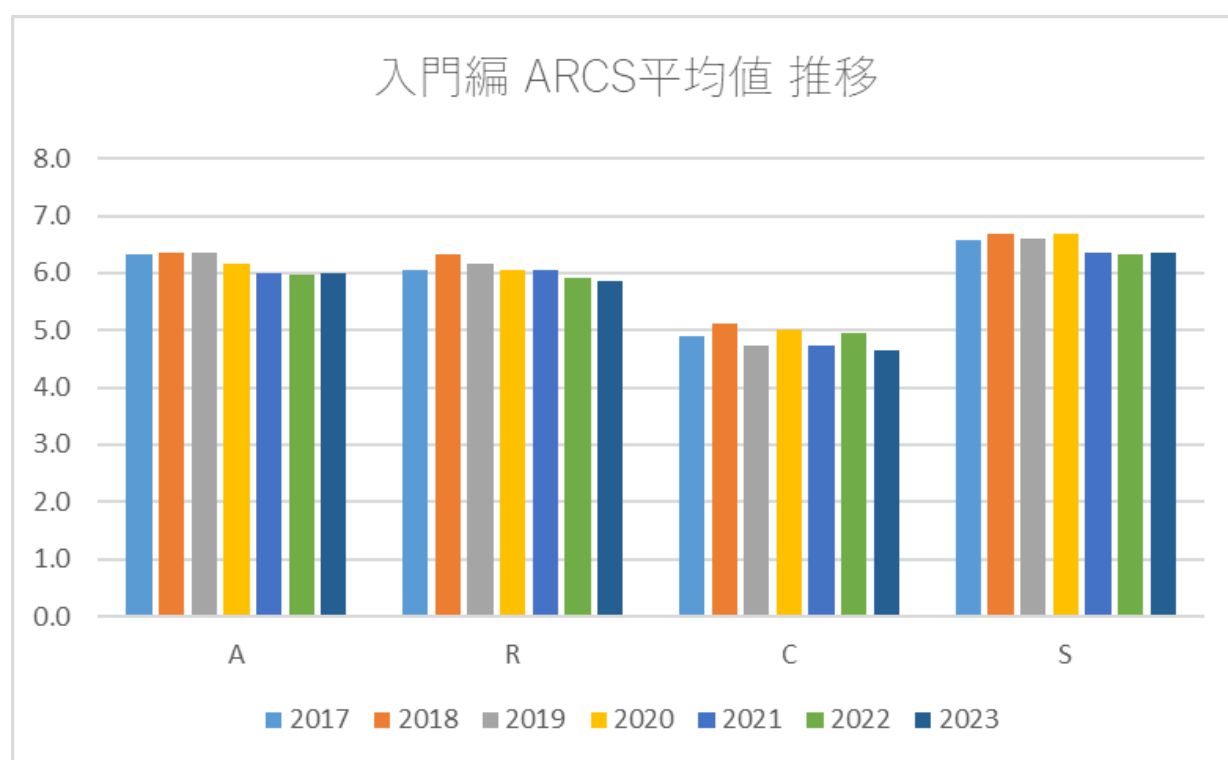
2023 年度の入門編・応用編受講者に対する受講後アンケート（入門編の参加 159 名のうち 111 名（受講者のうち 70%）、応用編の参加者 51 名のうち 34 名（受講者のうち 67%）では、講座に対する印象を ARCS モデルに基づき測定し、講座で掲げた学習目標を達成できたかについても、入門編と応用編別に回答を求めました。

1) 入門編・応用編についての印象

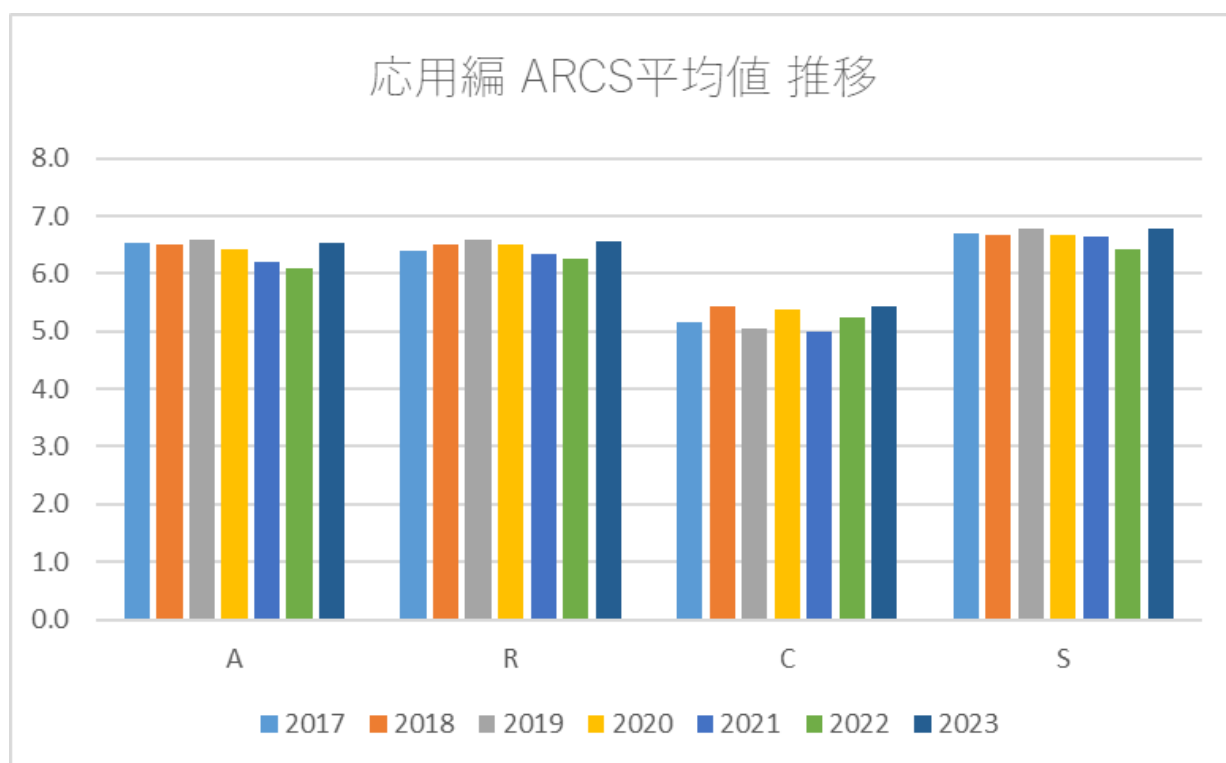
講座の印象について、ARCS 別に 7 段階評価で測定し、全体回答の平均値が 2017 年度から 2023 年度までの間でどのように推移しているのか、調査しました。

その結果、入門編、応用編ともに、C 以外の値が 6 以上を示し、C に関しても、入門編では 4 以上、応用編では 5 以上の数値を示し、講座への評価が高いことが確認できました。

以下の図で、講座への印象に関する回答結果を年度ごとに提示しました。



図：講座（入門編）への印象に関する ARCS 平均値の推移（2017 年度から 2023 年度）



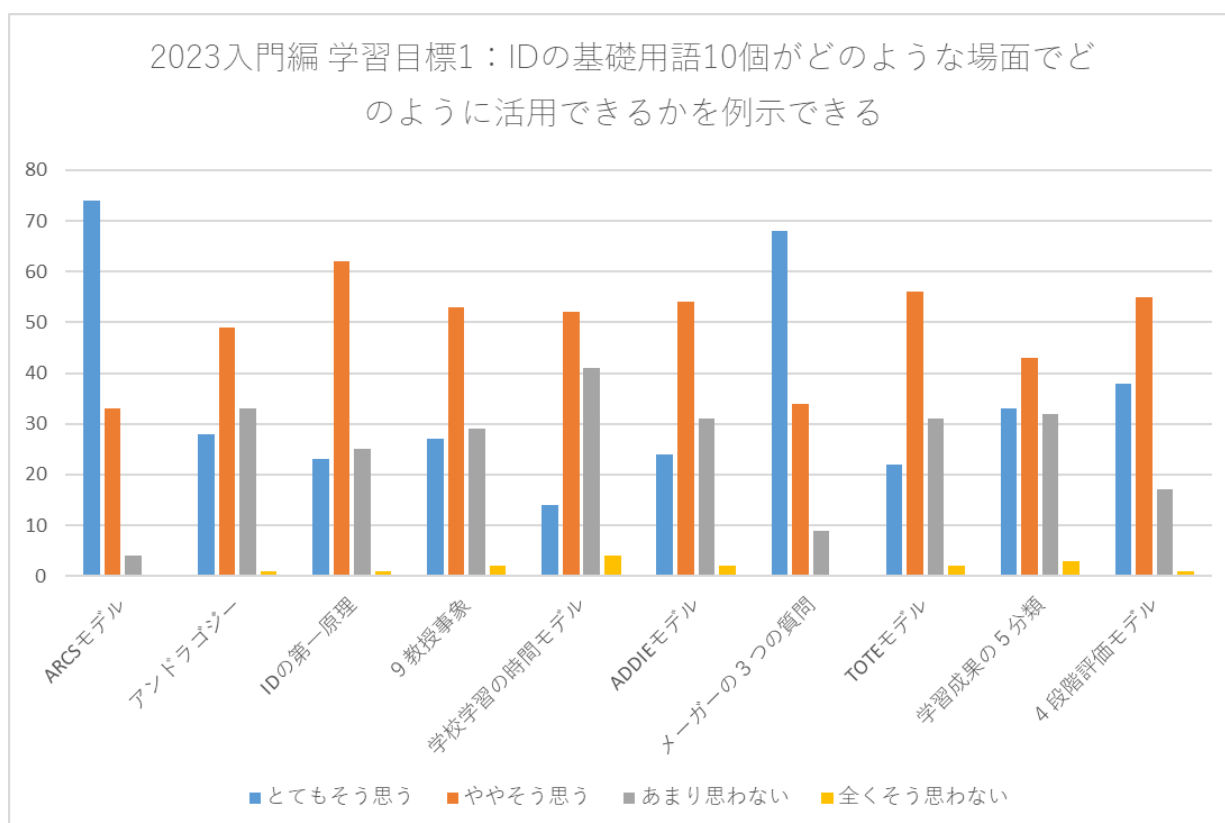
図：講座（応用編）への印象に関する ARCS 平均値の推移（2017 年度から 2023 年度）

2）入門編・応用編での学習目標達成状況について

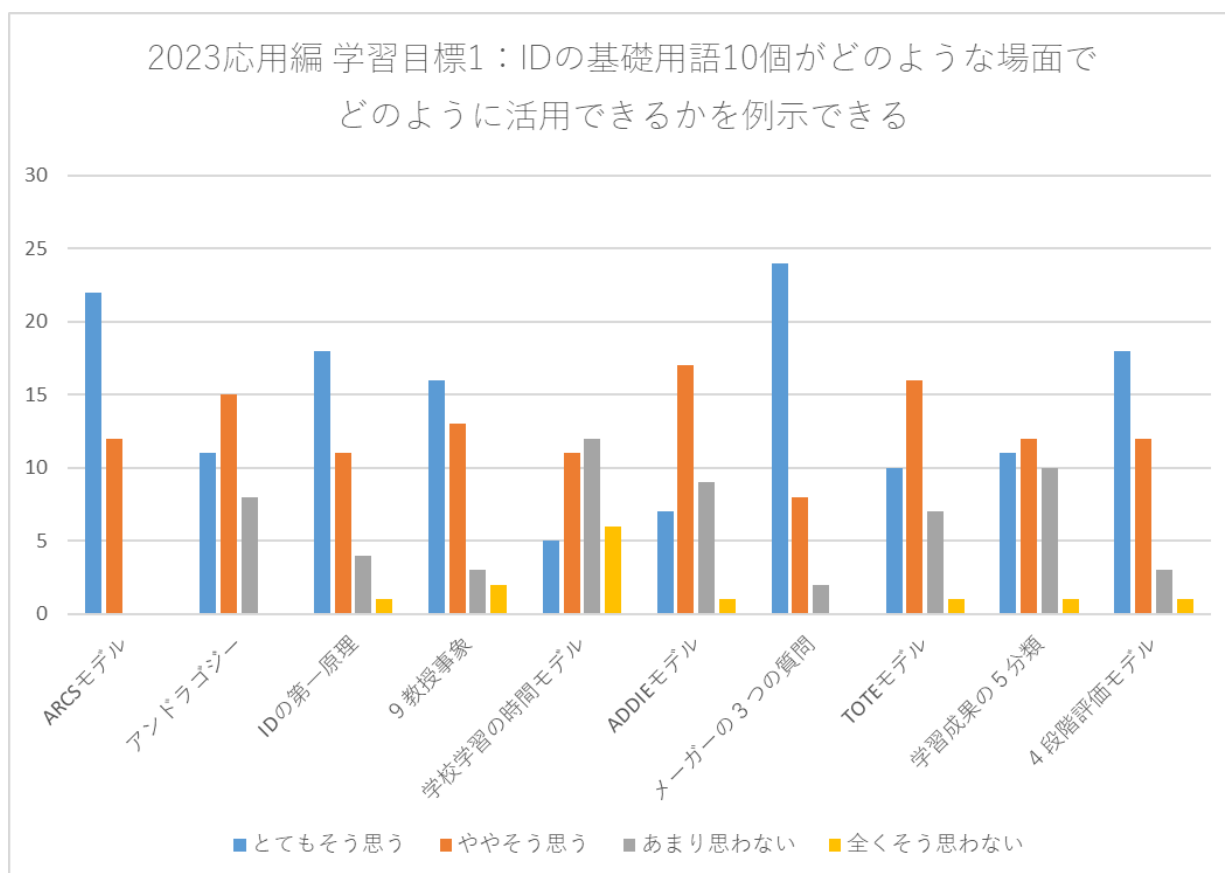
入門編で掲げた学習目標 1 の達成について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、学習目標 2（ARCS モデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる）の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が 90%を超える高い値を示しました。

また、応用編で掲げた学習目標の達成については、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、学習目標 2（講座で学んだ ID モデルを自分の教育事例の改善に応用していこうと思う（態度））の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が 100%の値を示しました。

入門編と応用編での学習目標達成に関し、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が過半数を越えている項目は応用編における「学校学習の時間モデル」の 1 項目のみでした。以下に、入門編学習目標 1 の到達状況と、応用編学習目標 1 の到達状況に関する回答結果を提示しました。



図：入門編学習目標1の到達状況（2023年度）



図：応用編学習目標の到達状況（2023年度）

参加者の声（レベル1）

応用編へ参加された方からいただいたコメントの一部をご紹介します。

＜プログラムの内容・運営方法・成果に関すること＞

- 対面ということもあるが、学習者どうしてお互いのパーソナリティを把握できた。
- リアル開催だったので、周囲の方と休憩中などもコミュニケーションが取りやすかった。
- 教えることを良くしたいと思う方々と交流できて刺激を受けた。
- 自分の研修改善案を使用したディスカッションと検討ができること。
- 具体的に自分の研修のブラッシュアップができた。
- 自分の教育事例について改善点を検討できた。
- 他社が悩んでいることや取り入れていることを知ることが出来た。
- 数年前、入門編を受講した際は、ARCS モデル中心で、他のモデルの話に至らなかったが、今回は、他のモデルを含めて、学習を進めることができて、ありがたかった。
- 入門編と応用編という組み上げなので、入門編で基礎的知識を学び、応用編では ID に関する用語が受講者間で共通言語となっていた点は、学びが深まる要因だったと感じる。
- 自身の実践事例をワークの中で発散⇒FB⇒収束という流れで進めていく中で、最終的な改善策が主体的なものになっていった。その方法が今後のアクションに繋がると思う。
- 消化不良になりそうでしたが、ディスカッションが多く設計されていたので、考えることが多く、学びにつながりました。
- 今まで受講者として数多の訓練、教育、研修を受講してきましたが、昨秋から ID 理論に触れ、改めて過去の経験を思い出しながら、実際の経験と理論を結びつける作業を（無意識のうちに）繰り返していたことに気付きました。少し大げさですが、入門編も事前課題、事後課題共に苦しみました。応用編の事前課題に取り組みながら、ID を知る前の世界には戻りたくない、時計を巻き戻すことができるならばもっと早い時期に勉強しておけばよかったと思えるほど、ID 以前とは見える景色が変わっていることに喜びを感じています。
- ペアワーク×2、グループワーク×1 で計 3 回は自分の挙げた研修についての説明をしたことで、自分の頭の中がどんどん整理されていくのが分かったこと。研修の設計の際も、ID の考え方を自分に適用してアウトプットしながら整理していくことが重要と感じました。
- 入門編でもですが、スタッフの皆さまの運営に本当に無駄がなく、間のようなものが何もなかったこと。自分も研修を運営する際に、受講者を待たせたり手持無沙汰にさせたりしてしまわないように、心から見習いたいと思いました（綿密な準備の必要性を痛感しました）。
- 対面式で参加させていただいたので、やはり対面式での意見交換は得るものが大きいと感じた。WEB は交通の面で便利だが、どこか俯瞰してしまう時があるような感じがした。実際鈴木先生や皆様にお会いすることができて、学びたいという気持ちが強くなるように感じた。
- アウトプット中心であり、成果がみえやすいこと。
- 講師による回答時間がためになり、その時間がきちんと設けられていること。

＜ペアワーク・グループワークに関すること＞

- ペアワーク、グループワークで意見の交換ができてよかった。
- 他の受講生から新たな視点を得られた。
- 相手へのフィードバックが役に立てたと感じられた。
- 自分の課題を中心に他者から意見をもらえた。
- グループワークやペアワークで広く意見をうかがえた。
- ペアワーク 2 回を通して、じっくり他の職場の方とお話できた。
- 自分の事前課題について、グループワーク・ペアワークで深掘りできた。
- 自身が今まさに感じていた教育の悩みをワークを通じて FB や改善をすることで解消することができた。
- 分野が異なる方とのグループワークは、考えることが違って見識が広がり、逆に同様のことで悩まれていたり共感を持ち、忙しかったです。
- 実際に受講者の方が抱える課題についてアドバイスし合えたことです。机上の空論ではなく、改善途上の実際のプロセスに関わっていただき、また関わらせていただき「生きた学び」となりました。
- 多様なバックグラウンドの受講者と様々交流できたこと。アドバイスも一通りのものでなく、多角的な視点からいただきました。
- ディスカッションの時間が十分であった。
- 対面で様々な分野の方の話を聞けたこと。

＜課題の添削・教員による指導に関すること＞

- 自分の疑問に思っていることや、解決したいことを鈴木先生に直接ご教授いただけてよかった。
- まだまだ表面的な理解しかできていないが、一度は検討をした上での疑問点を質問できた。
- 鈴木先生が質問に答えてくださり、ヒントが得られた。
- 実践での困り感を鈴木先生にご助言頂けた。
- 鈴木先生に直接ご指導いただけた。
- 鈴木先生からのコメントタイムがたっぷりあった。
- 質問の機会が 2 回あったのはよかった。
- 鈴木先生に直接質問できる機会が 2 回あったこと（自分の聞きたかったことは全て聞くことができました）。
- 自身が気づいていなかった改善点をワークや鈴木先生の F B を通じて見つけ出すことができた。
- 鈴木先生の回答がシンプル＆明確だったんで腹落ちした。
- 鈴木先生と直接お話できたこと。講座のあとの懇親会の場合でも、レベルの低い私の質問にも大変丁寧に、的確にお答えくださり贅沢な時間でした。

6 ヶ月後追跡アンケートの結果（レベル3）

＜講座前と講座後（現在）の状況について＞

インストラクショナルデザイン公開講座 応用編（2022 年度）の 6 ヶ月後追跡調査アンケート（デジタルバッジ取得者 68 名のうち 47 名（バッジ取得者のうち 69%）では、「講座で学んだことをどの程度、自分の言葉で書き出せるか／書き出せていたか」、「講座で学んだことをどの程度、業務で使おうと思っているか／思っていたか」、「講座で学んだことをどの程度、応用できるか／応用できていたか」、「講座で学んだことをどの程度、実際の業務で活用できているか／活用できていたか」、講座前と講座後（現在）の状況について7段階で回答を得ました。その結果、「講座前」が「講座後（現在）」の数値を超える項目はなく、特に、「講座で学んだことをどの程度、業務で使おうと思っているか／思っていたか」については「講座後（現在）」の数値が 6.0 と高い数値を示しました。「講座後（現在）」の他の項目についても数値が 4.7 以上であり、それを下回る項目はありませんでした。

＜職場での行動へ移すための準備状況について＞

「講座終了の時点で、学んだことをしっかり業務に活かしていこうという気持ちが、他の業務に対する気持ちに比べて強かったか」、「講座終了の時点で、何をゴールとして学びを仕事に活かしていくか、具体的な目標を設定していたか」、「講座終了の時点で、他の業務で忙しくても、学んだことを仕事に活かすために努力する覚悟があったか」、「講座終了の時点で、職場に戻ってからやるべきことを具体的に記載した行動計画を作成することができていたか」、「講座が終わったあと職場で、学んだことを仕事へ活かすために、自分の気持ちをコントロールすることができていたか」、「講座が終わったあと職場で、たとえモチベーションが下がっても、講座で学んだことを仕事で活かせるよう努力を重ねることができていたか」、「講座が終わったあと職場で、ほかの目標の影響を受けず、講座で学んだことを仕事へ活かそうとし続けることができていたか」、講座後の行動へ移すための準備状況について回答を得ました。その結果、その結果、全ての項目で「そう思う」と「ややそう思う」が過半数を超え、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が過半数を上回る項目はありませんでした。特に、「講座終了の時点で、学んだことをしっかり業務に活かしていこうという気持ちが、他の業務に対する気持ちに比べて強かったか」については、「そう思う」と「ややそう思う」と回答した受講者が 94%を占めました。

＜講座後の実践状況について＞

「講座で学んだ内容を復習する機会があったか」、「講座での学びを職場で実際に活用する機会があったか」、「職場の上長は講座での学びを職務で実際に活用することを奨励していたか」、「職場の同僚は講座での学びを職務で実際に活用することを奨励していたか」、講座後の実践状況と周囲からの評価について回答を得ました。その結果、全ての項目で「そう思う」と「ややそう思う」が過半数を超え、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」が過半数を上回る項目はありませんでした。特に、「講座での学びを職場で実際に活用する機会があった」においては、「とてもそう思う」と「ややそう思う」と回答した受講者は 85%を占めました。以下、6 ヶ月追跡調査によって報告された教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

〈講座で学んだことをどのように業務で活用できているか〉

- 講座受講時点と業務内容が変わり、教育コンテンツを新規で作成することがなくなったから。一方で、社内イベントで学びを活かす機会がたまにある。
- 先ず、実際に同様の研修が発生していないため、活用度は低いと判断しています。特に活用したいと考えていたことが、研修後のテストでした。これまでスキル系の研修後に回答式テストの実施経験がなく、他担当者の反応が良くはなかったため、実践して有用度を確認できなかったことは残念です。一方、自身のファシリテーションスキル向上のため、演習で研修当日について講座を反映して充実につなげたことはプラス評価しています。
- 前期のチームティーチングを行っている授業について、ID の視点から改善案を考え、提案することができている。また、次年度に向けて改善するための行動（問題点の洗い出し、各ステークホルダーへのインタビュー）を起こし始めている。
- ID で紹介されていた道具を使うことはもちろんなのだが、講座の中のグループワークからの気づきや、事前事後学習でのオンライン上での参加者同士の関わりからの気づきなども含め、講座の中での体験が全て今学期の授業改善に役立った。学生の学びに対する態度や関心が、以前と比較して格段に良くなっていることが伺えたとともに、授業での学びが学生の実際の行動変容に結びついていた。
- 実際に業務（講義等）の中ですでに取り入れているが、ID の理論などどのように実施するかなどは、まだ本などを振り返って確認していく必要があるため。
- 基礎編および応用編を講座受講後、「インストラクショナルデザインの道具箱」「学習設計マニュアル」「教材設計マニュアル」書籍を購入し、特に道具箱のほうは授業のシラバス作成や日頃の教授計画、授業準備に都度見返しております。特に自分の中で活用できていると感じるのは、やはり日々の授業を進めていく上で大切な学習者の達成目標です。メーガーの3つの質問を常に目に見えるところに書き出し、授業設計をしています。また、学習意欲を保持させるための ARCS を意識した授業計画を心掛けています。
- 授業設計の中に、ARCS モデル、アンドラゴジー、ID 第一原理、9 教授事象、ADDIE モデル、メーガーの3つの質問、学習成果の5分類を取り入れている。
- 研修で学んだことを活用する業務を担当していなかったが、研修を受講したことによって研修企画に関する業務についても担当できる自信ができた。それで実際に、研修企画の業務を担当をサポートする業務に関与し始めている。
- 授業や職員研修での意識づけや、どのように入り口を揃えたら授業が効果的に実施できるか、授業後のアンケートにおいてどの程度目標が達成されたか、受講者の満足度はどの程度だったかを確認するようになった。授業や職員研修での自己の振り返りができるようになり、さらに魅力的な授業のプランニングをしようという意欲につながった。また、受講者が魅力を実感してもらうことで、主体的に学ぼうとする受講者の意欲に繋がっている。
- 受講前に比べて、どうしたら楽しく学べるかを意識している。
- 入口と出口を意識するようになった。従来の研修を ID 理論に当てはめたりして、何が抜けているのかを検証した。特に ARCS モデルは、受講者に伝えたい内容を伝えるためには、必要な理論であることを理解できた。TOTE モデルを活用しています。
- できるだけ受講者レベルを知る、レベルに合わせた研修内容を企画している。ID 理論を学んだものが、共通言語として活用することで、業務の効率化ができていると感じています。
- ARCS モデルが非常に印象に残っており、実践を心がけているところ。特に受講者の注意を引く、参加してもらうことに重点を置いている。オンラインをフル活用して参加者数を

上げたいと考えているが、社内的には新しい試みに対する抵抗が大きく、全く実現できていない。あらゆる機会を利用して実現したいと考えている。

- 受講を通して自身のカリキュラムを見直して、言語化する経験ができたことが大きい。言語化することで見通しがよくなりカリキュラムの一貫性を意識できるようになった。
- コース設計の際に必ず、ニーズ分析に重きをおき、対象者のニーズを判断した上で、目標設定をし、ゴール到達までの道筋を立てていること。また、コースの途中で効果に？が見えた時には対象者と相談して調整を行い、新たにゴール設定をしているところ。
- 研修は必ず何らかのアセスメントを取り入れ、アンケート結果と照らし合わせて、研修直後の知識とスキルの理解度を測定している。また業務への活用状況を次回研修時に確認している（活用場面もフリーで記入してもらい、KHcoder で簡単なテキストマイニングして分析している）。
- 全ての講義や研修において、ID 理論を基に設計するようにしている。
- 例えば ARCS モデルを研修に活かしているため。受講者が興味を持つようなこと（Relevance）を提示し、解決できそうな枠組みを提示することで注意を引き（Attention）、実際にワークを行わせることで自分にもできるという自信をつけさせ（Confidence）、研修でどれだけできたかを振り返ることで、満足感を得てもらう（Satisfaction）、といった風に活用している。
- レポートとして研修設計の分析及び改善ワークシートを提出するという活動や講座で習ったことを活かして、自分自身でインストラクションを行う際の課題を作成して実際に運用できているため。
- 授業設計の際に、レベル「マイナス1」から意識した設計を行うようになった。また、「ガニエの9教授事象」で説明される転移と保持の概念についても、言語学習を行う際にも重要な項目であることから、いわゆるポスト・リーディング活動におけるタスク設計の際に参考にしている。
- 現在、新たな教育訓練を検討しており、公開講座で学んだ理論を活かしながら設計している。「理論の基礎を知る」「学んでいる同業他社と交わる」ことができ、学ぶ意欲を高められる講座として非常に有効であったと考えたため。
- 研修の目標設定や研修評価について、学んだ研修設計の技術を活用している。また継続的研修実施に繋げている。
- 授業設計の段階で ARCS モデルを意識することができている。また、一方向の講義ではなく、学生がディスカッションしながら考えることができる授業を心掛けるようになった。しかし、時間が経過したため忘れてしまったこともあると思うので、資料などを見直す時間を定期的に作ることが必要だと思った。
- 講座受講後、社内で人材開発部署を立ち上げ、入社者のオンボーディング活動に活かしている。今後すでに予定されている研修計画が複数あり、IDDIE モデルに基づいた実践の場がある。他大学のワークショップデザイナーの課程を修了したところだが、そこでも経験学習モデルの知識が活きた。
- もともと、高等教育機関の職員向けの研修サービスを提供していたので、当該講座で得た知識を、既存の研修メニューのブラッシュアップに活用した。具体的には、部内メンバーを招集し、各自1テーマの既存の研修を持参してもらい、私がファシリテーターとなり、当該講座で得た知識の伝達をその知識を活用した既存研修メニューの見直しを研修形式で実施した。

- 講座受講時はコミュニケーション研修を担当し、受講者の上長アンケートなどによるフォローを検討し実施に向けて活動できたため。その後、4 月から新入社員研修を担当したのですが、ARCS モデルを常に意識した研修設計を実践出来ました。特に関連性（自分が MR として現場に出た時）や自信（やればできる難易度での設定など）を意識出来ました。
- 整備士資格取得の審査を受けるには専門訓練の受講が必要だが、受講前の関門試験の合格率が大きく下落している。合格率向上のため、ADDIE で分析を行い訓練生の苦手科目を明確化し、ARCS で好奇心を刺激し後押しする研修の準備を教官と進めている。また、到達すべきゴールの認識をあわせ、必要な知識を自主的に学び易い学習環境の調整をアクションプランに追加し組織的な検討を進めている。
- ID 研修を受講する前からインストラクションデザインは意識して実践できている部分は多かった。一方で、意識できていない部分があることを気づかされ、研修転移を起こすための工夫をいくつか実践することができた。それは研修後のフォローアップであり、特にキャリアワークショップ後のキャリア面談、面談後の Teams のチャットを使ったメッセージのやり取りをおこなった。
- ARCS モデルを主に、生徒のやる気やモチベーションの向上をおこなってきました。説明の教育のみにとどまらず、面白かったと思えるようストーリーを組み立てし生徒のやる気を引き出す事を、しっかり考えコミュニケーションを取りました。
- 私は講座受講後、ARCS モデルを適用した授業展開を計画し、実施した。それは、C-2「過去の自分との比較で進歩を認める」に該当する実践である。具体的には、事前学修課題と事後学修課題を同じテーマとした。
- また、事後学修課題は、授業を通して学んだ知識を活用することを条件とした。これにより、自ずと事前学修課題の成果が修正され、学生は、自身の進歩を認めることができたと思う。
- 依然と比べ、ID を常に意識するようになりました。研修 Agenda を組む時には研修効果が高くなるような建付けにしようと試みるようになり、効果測定も工夫するようになりました。
- 受講した際に計画した（修正した）授業目標・授業内容・授業方法を、その後大学の 4～8 月の授業で実施したため。また、この 2～3 ヶ月に行った研修セミナーでは、目標設定や研修の効果測定などに、この講座で学んだ知識を活かしたから。
- 学んだ内容を積極的に研修の設計に反映し、実際に研修の実行ができているため。
- 研修の効果測定にて学んだことを思い出し、テキストなどを読み返している。
- FD 担当部門に所属しているため、ID の考えを念頭に置きながら、研修等の企画を考えている。ただ、実際には教員のニーズや所属機関の考え方等があり、ID の考え方を十全に生かしきれているとは言えないものの、研修を受けてから、「ID の考えを使ったらどうなるだろう？」という考えは日々の業務で考えられるようになった。
- 現在の業務では、DX 人材育成カリキュラムの作成と研修実施フェーズに取り組んでいます。研修設計のフェーズでは、ARCS モデル、TOTE モデル、評価の 4 段階モデル、そしてガニエの 5 分類などを参考にして設計しました。現在は実施をしながら改善活動を行っています。また、人事労務の業務にも兼務しており、エンゲージメントサーベイや人材アセスメントなどにも従事しています。これらの業務から得られるサーベイ結果などから研修設計実施に役立っています。
- 航空整備士の国家資格取得訓練（入社から 6 年目くらいまでの期間で実施）の新規設計を行っている。学習した ID 理論を活用して訓練を設計すべく取り組んでいる。今後、詳細

な教育カリキュラムの設計や実践、評価に移っていくフェーズになるため、より効果を発揮するもしくは効果が表れてくる段階になると考える。

- 業務上既存のプログラムではない、新たなアイデアや研修プログラムを設計することが多く、そのたびに「メーガーの 3 つの質問」や「ADDIE」モデルを念頭に置いているから。
- 上期では研修を請け負う機会はありませんでしたが、公開講座での Q&A、講師の皆さんのコメントが日常業務の中で、部下指導をする際に意識しています。例えば、「ギャップを埋めるために教育戦略がある」「研修は最後の手段」「出口が重要。会社のためになるゴールが設定されていないとだめ」「本人に聞いて見ないとわからない。聞いてみるのが一番早い」特に出口設定は、新人教育や職務教育をする上で、大事にするようになりました。ゴール設定が手段になっている場合があり、「何のために？」を繰り返し、ギャップの明確化とゴール設定を行えるようになりました。

＜講座での学びを職場で実際に活用していくうえで有効だったこと＞

- 同僚との振り返り、特別に時間を設定するものではなく、講座のサイトについて話題にしたり、研修始動時、終了報告前に ID 的要素をあえて入れる様にすることが有効と感じました。話題にする回数をいかに増やすか、継続するかの工夫はもっと出来たらよかったです。
- 講習の事前課題に対する講師からのフィードバック。実際に現場で ID の考え方を必要としている課題に対して、講師からのフィードバックをいただいたことは、その後職場で活用していく際に有効になった。フィードバックをいただくことで、自分が何に困っているのか、ID を活かす上でつまずきがちな問題点を指摘していただいたことが、とても役立っている。
- 「研修は最後の手段」という鈴木先生のフレーズは、仕事の中でいかに教育、研修をしないでできないかを考えるきっかけになった。
- ID 理論を活用する題材があることが一番有効であった。私は教育を実施する立場ではないが、訓練設計業務を新たに担当しているため、学んだ理論を取り入れる環境があることが幸運であった。
- やはり教育や研修を行う際には目標設定を明確にし、何をゴールとするかを明確にしておくことが大切であり、学習の効果につながっていくと考えています。
- 研修企画からコンテンツ作成、運営という業務は、業務効率化が推進されている。研修企画もやみくもに作成するのではなく、ID 理論を取り入れた企画は、無駄のない、効率と質が伴ったものを生み出せるのではないかと考えています。
- 事前・事後のレポートで相互にコメントをする課題は面白く、色々な視点や意見を見ることで自身の現場の在り方を相対化することができてよかったです。
- 常に手元に 10 個の ID モデル（いただいたコピー）を置いて業務に活用できる状態にしていたこと。
- 研修の受講者選択に関して、検討する上で有益であった。
- 研修内容がブレないよう常に目的・目標を振り返り、目的・目標のすり合わせには時間をかけるようになった。
- 仕事が研修の設計や運営など講座の内容に直結することが多く、学んだことを活用することができている。

- 現在、無職のため ID を実践していく場がないが、自分がいろんなことを学ぶについて、
どういうふうにしたら楽しく学べるようになるかいうことは、意識して行うようになった。
- 私の職場は大学で自身が一人で担当する講義のため、基本的に誰の影響も受けずに実施
することができた。15 回の授業の中で、講座の中でのアドバイスなどを思い出しながらト
ライ&エラーを繰り返し、授業改善をすることができた。
- 講座受講後の最終レポートを作成する際に、講座で学んだことを活かして、授業をどのよ
うに改善するのかをかなり具体的に計画していたため、その後の実践（授業）でそれをそ
のまま活かすことができた。また、講座受講後この半年の間に研修セミナーを行う予定も
あったため、講座受講時に、その到達目標、授業内容、授業方法、研修の効果測定なども
どのように組み立てていけばいいのか、具体的にイメージしながら受講できた。そして、
講座で学んだことをもとに、セミナーを組み立てることができ、それをそのまま実施でき
た。
- 先述した内容と重なるかもしれませんが、ID の第一原理での①課題に挑戦、②活性化、
③例示、④応用を活用することで、受講者の「知りたい」、「解きたい」という意欲はこ
れまで以上に効果があったと実感した。中等教育の現場での中高生は答えを求めがちであ
るが、単に与えられた課題に取り組むのではなく、②活性化、③例示 を示すだけで、「知
りたい」、「解きたい」から「解けた」達成感は大きな成功体験となって、④応用への意
欲的な取り組みを実感できた。
- 最終レポートで研修の改善案を書いたのがよかったと思う。少なくとも講座終了時点では
これからいつまでに何をすべきかがとても明確になっていたし、決意もできていた。講座
で聞いた「学び続けるのがプロ」という言葉も自分のモチベーションが下がったときに思
い出すようにしている。講座を受けたことで以前より自信が持てるようになり、カリキュ
ラム作成後、上司に許可をもらうために説明するときや、授業担当講師に教え方を説明す
るときも、しっかり受け答えできるようになったと思う。
- ARCS モデルを意識した授業展開の中で手応えがあったものは、高専の 2 年次留学生に対
する授業活動です。日本社会に高校生という若さで飛び込んだ留学生に対し、自国とは違
う文化、日本事情に興味を持ってもらえる（Attention）ような内容にし、その中で地域に
自分たち外国人を地域の在住日本人に紹介する機会をいくつか設け、その準備を授業の中
で月に 1 回程度違う内容で行うことができました。特に手応えがあったのが、「外国人に
よる日本語弁論大会」に参加してもらったことです。最初消極的だった学生らでしたが、
地域日本人やクラスメイトとの関係性を構築していったこと（Relevance）、1 年次の成
功体験をもとに自分のやってきたことに自信が付き（Confidence）、やってよかった、自
分の弁論した内容を有言実行させようという意思が本人に芽生えた（Satisfaction）のを
感じられたことです。これは本当に教師冥利に尽きました。
- 講座での学びを職場で活用するというそのものを目標にせず、学びの活用としてどん
なことをするのかという具体性と、その先にある組織への貢献を常に言語化して他者に説
明できる状態を維持している。その結果、私の学びをこっちでも応用的に活かしてくれな
いかという他部署からの相談が生まれ、組織内の協働性を高めることに繋がっている。組
織人としてインストラクショナルデザインを活かすのであれば、それが組織にどのような
貢献をもたらすのかを言語化して示し、同僚の役に立つ実績を作って認知を広げることが
必要であり、それが結果的に自身の学びの活用になるのだと思う。
- 上長や同僚も、インストラクショナルデザインについて、関心を示して下さっていた。

- 大学のFDにてIDを含めた自分の教育体験について報告する機会を得たことで、他の先生方からコンサルを受けるようになった。
- IDの考え方と学びを周囲と共有したことで、共通認識のもと研修設計ができた。
- 他の場所で、インストラクショナルデザインについて学んだ方をインストラクションする機会があり、その方とは有意義な会話をすることができた。
- 職場の全員で受講したことでIDが共通言語になったことは有効だった。
- 同じ部門だけではなく、他部門も一緒にIDの導入を進めており、刺激になっていると考える。我々の部門ができていない部分がより鮮明になり、モチベーションにも繋がる。新しいアイデアを生み出す際に、多様性が大切というように、一緒により良い教育訓練を作っていこうという想いをもった仲間がいることはすごく良いことだと考えますし、意図的にそのような仕組みを作ることは良いと考える。教育訓練が現場と乖離したものにならないよう、より実践的で、自ら主体的に体験できる機会作りを進めている。運航機材以外に、当社では訓練専用機を持っており、その不具合を解決することを訓練の題材にするなど工夫した機会作りを進めており有効なものになると考えている。「好奇心」と「行動力」を引き出すことが大切だと考えており、新しい技術の活用や生産性向上に繋がることは積極的に行いなるべく無駄な作業は減らすことを組織的にサポートしている。意識的な One on one できちんと部下や同僚に気を配ることは業務の成否に繋がるものと考えている。

共同利用拠点事業② ID ポータル

本大学ではインストラクショナル・デザインに関するイベントや文献等の
情報を収集するためのサイト「ID ポータル」を運営しています。

本年度の取り組みの概要

本センターでは、ID に関する情報収集のためのウェブサイト「ID ポータル」を運用しています。ID ポータルでは、ID と関連する学会やワークショップ等のイベント、ID に基づいた教育実践をまとめた論文情報、教育実践のお悩みを ID に基づいて解決する QandA 等を提供しています。

今年度は、昨年度に導入した Google アナリティクスバージョンアップにあわせて 4 (GA4) へとアップデートし、分析を開始しました。従来の Google アナリティクスが提供終了となりデータの取得が不可能となりましたが、導入の結果、現在もデータの取得が可能になりました。今後のラーニングアナリティクスへの展開を含め、データに基づく分析や改善施策の立案などが可能になります。

昨年の Google アナリティクス導入によって、ID ポータルに愛着を持ちうる関係者に対し、ID ポータル外部でもしっかりと情報を提供するタッチポイントを構築していくことの重要性が導かれました。その対策として、2023 年 1 月より拠点担当の有志によって運営されていた Facebook ページを公式の SNS として位置づけ、運用を開始しました。令和 5 年度に入り、その運用を継続的に進めています。

さらに、「ID について学びたい・知りたいという人にとって入口（ドア）となるウェブサイトでありたい」という新たなプラットフォームでより多くの方に本サイトを利用していただけよう、次年度以降も拡張を進めたいと思います。



図：ID ポータルウェブサイト：トップ画面

コンテンツ一覧

ID ポータルは、教授システム学専攻の同窓生をはじめ、多くの関係者にご協力いただきながら、以下のコンテンツを提供しています。

コンテンツ カテゴリ名	内容
イベント	ID に基づいた研究・実践が発表される学会・研究会（日本教育工学会、教授システム情報学会、ICoME 等）や、ID について学習できるワークショップ（熊本大学公開講座等）について、随時、配信しています。
ID 関連文献等	ID に基づいた研究・実践についてまとめた論文や学会報告を随時、掲載しています。
ID マガジン	ID と関連するブックレビューや熊本大学教授システム学専攻主催の「まなばナイト」等のイベントのレポートを事前登録者に対して配信、サイトへ掲載しています。尚、ID マガジンは、熊本大学教授システム学専攻の同窓生有志で構成される「ID マガジン編集委員会」によって長年、企画・運用されています。
お悩み解 QandA	e ラーニング・授業・研修をデザインする際に出てくるありがちなお悩みをレイヤーモデル（e ラーニング、授業、研修等の質を 5 つの段階に分けて整理したもの）の 5 つのレベルごとに分類しています。「学習目標の種類によって、どんな学び方、教え方をすれば効率的か」や「知識やスキルではなく、望ましい態度を教えたい」等について、ID の観点からの解決策や関連するリソースを提供しています。
実力チェック	教授システム学専攻必修科目「インストラクショナル・デザイン I」を題材に、架空の教材企画書が提示され、学習目標や事前/事後テストの内容、前提条件等の各項目の適 a 切性を評価する活動を通じて、授業設計に関する知識・スキルを身につけているか判断できます。
作業支援ツール	教授システム学研究センター／教授システム学の鈴木克明教授が執筆し、多くの人に利用されている以下の 4 つの書籍で紹介されている授業設計のための作業を支援するための機能・資料が提供されています。 1. 教材設計マニュアル 2. 授業設計マニュアル 3. 研修設計マニュアル 4. 学習設計マニュアル

次の表「ID マガジンの発行数、イベント掲載、業績登録数」は、本年および過去の ID マガジン発行数、ID 関連のイベントの掲載数、ID 関連の業績の登録数を一覧にまとめたものです。大きな変化はありませんが、コンスタントにそれぞれのコンテンツが登録されています。こうした地道で丁寧な情報発信を継続して続けていくこととしています。

表：ID マガジンの発行数、イベント掲載、業績登録数

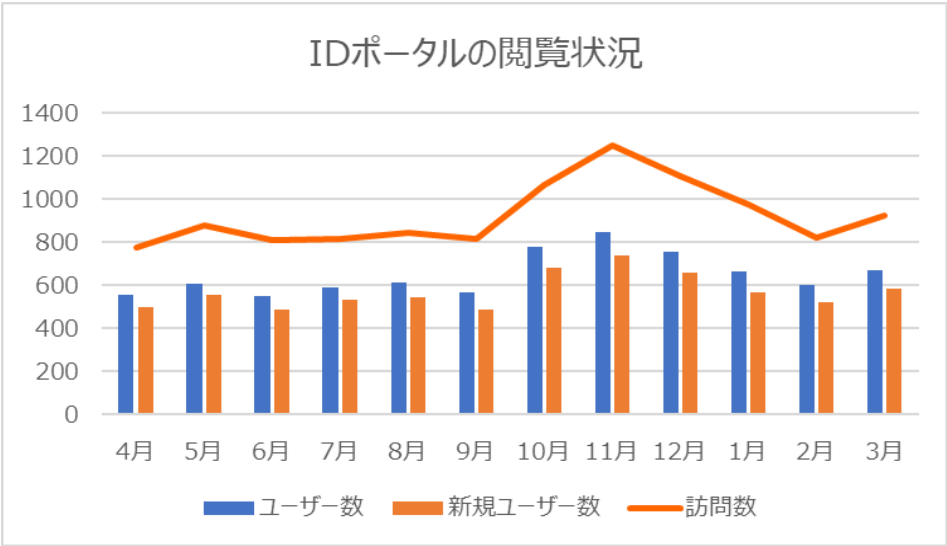
No	項目	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
1	ID マガジンの発行数	9	13	13	13
2	イベントの掲載数	49	45	48	54
3	登録された業績の件数	114	61	68	63

サイトおよび各コンテンツへのアクセス数

以下に示すように、ID ポータルは日々、多くの方にアクセス・利用されています。

表：月毎のサイトへのアクセス数

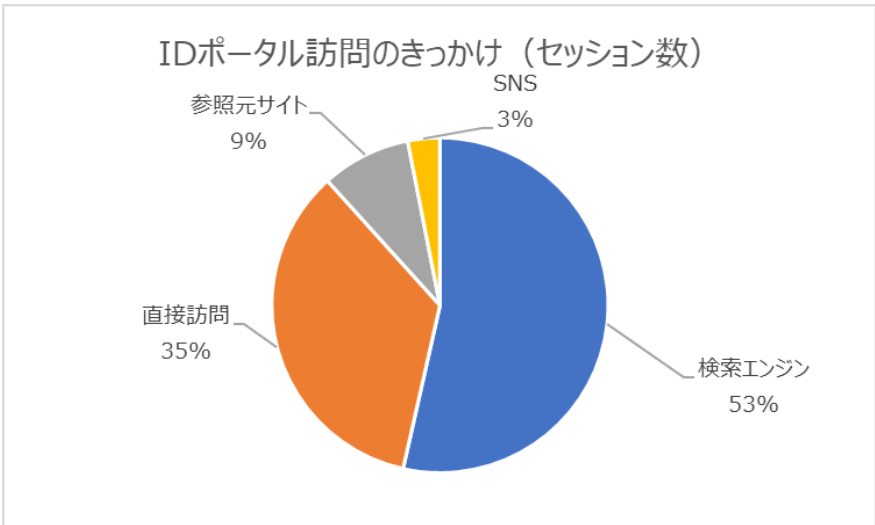
月（2023 年）	ユーザー数	新規ユーザー数	訪問数	直帰率	ページ/ セッション
4 月	555	498	775	64.26%	2.15
5 月	606	554	877	60.43%	1.91
6 月	550	490	812	66.38%	1.84
7 月	592	532	815	69.94%	1.73
8 月	612	547	845	61.89%	2.08
9 月	566	485	814	62.90%	1.98
10 月	777	681	1,067	67.10%	1.77
11 月	846	740	1,253	63.05%	1.71
12 月	757	662	1,108	65.61%	1.99
1 月	664	566	974	63.66%	2.05
2 月	602	521	823	67.56%	1.71
3 月	668	584	926	62.42%	2.42



図：ID ポータルのユーザー数と訪問数

表：ID ポータルの訪問のきっかけ（参照元）（2023 年 4 月-2024 年 3 月）

	ユーザー	新規ユーザー	セッション	直帰率	ページ/ セッション
検索エンジン	3,963	3,823	5,806	65.85%	1.85
直接訪問	2,505	2,447	3,776	67.16%	1.98
参照元サイト	438	347	931	55.53%	2.13
SNS	260	243	334	63.47%	2.13
合計	6,976	6,860	10,775	65.89%	1.93



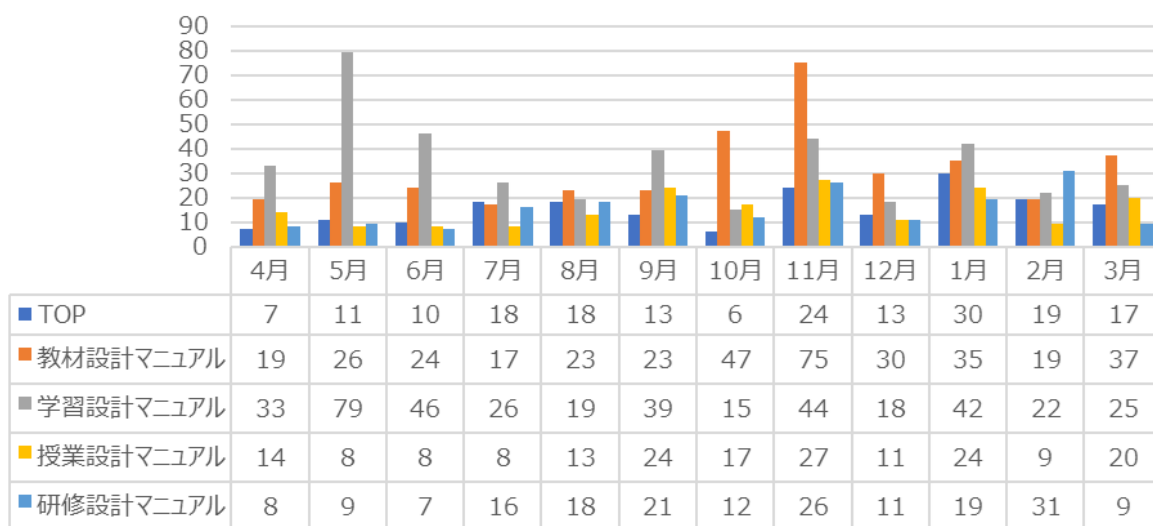
図：ID ポータルの訪問のきっかけ（参照元）（2023 年 4 月-2024 年 3 月）

表：ID ポータルユーザー数及び訪問数の時系列変化

(全体と SNS 経由 (2023 年 4 月-2024 年 3 月))

月	全体		SNS 経由	
	ユーザー数	訪問数	ユーザー数	訪問数
4 月	555	775	1	1
5 月	606	877	44	47
6 月	550	812	12	12
7 月	592	815	12	12
8 月	612	845	41	51
9 月	566	814	16	20
10 月	777	1,067	64	72
11 月	846	1,253	21	25
12 月	757	1,108	26	35
1 月	664	974	21	23
2 月	602	823	17	20
3 月	668	926	9	17

支援ツールページのページビュー数の推移



図：大学教員支援ツール（各作業支援ツール）のページビュー数（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

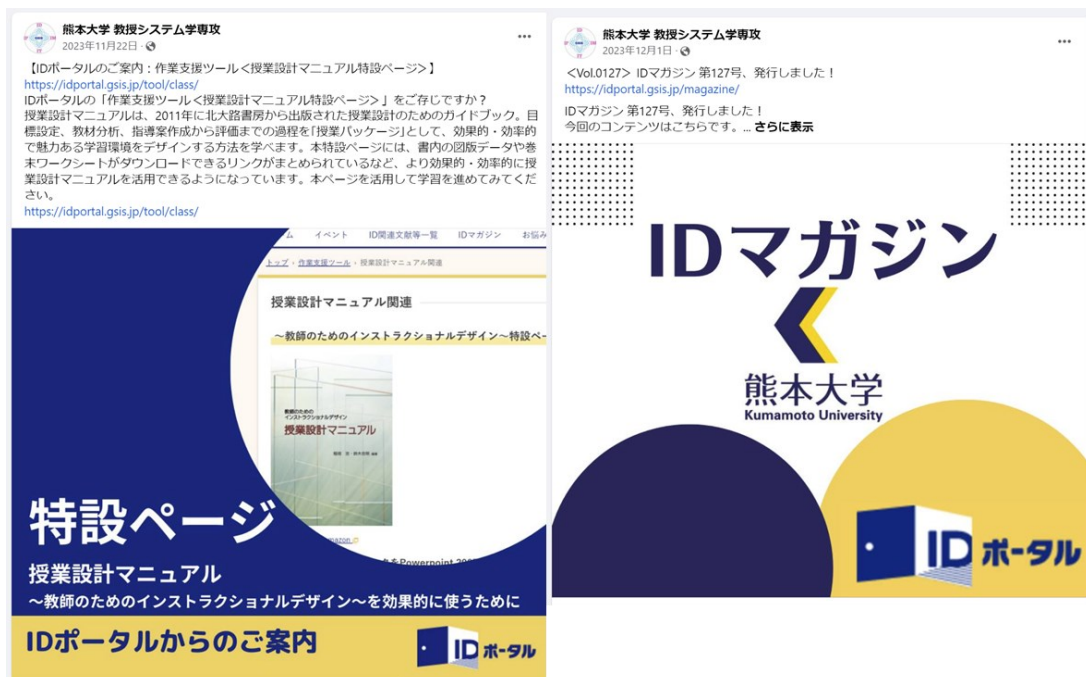
SNS の活用

2023 年 1 月から拠点担当の有志によって運営されていた Facebook ページを、公式の SNS として位置づけ、運用を開始し、当該ページの運用を継続的に進めています。

ID ポータルに係る投稿は以下の通りです。ID マガジンを見落としたユーザーに対するタッチポイントとして機能し、また、ID マガジンを登録しているユーザー以外にも新たな利用者となってもらべく、ID ポータルの内容をお知らせし、「知ってもらう」窓口となるように運用しています。

表：Facebook ページにおける ID ポータル関連の投稿

投稿日時	内容
2023 年 5 月 25 日	【ID ポータルのご案内：ID マガジンとは】
2023 年 6 月 23 日	【ID ポータルのご案内：ID お悩み解決 Q&A サイトとは】
2023 年 7 月 25 日	【ID ポータルのご案内：イベントとは】
2023 年 8 月 25 日	【ID ポータルのご案内：ヒゲ講師の活動日誌】
2023 年 9 月 27 日	【ID ポータルのご案内：ID 実力チェックとは】
2023 年 10 月 25 日	ID ポータルのご案内：作業支援ツール<Job-Aid：教材設計マニュアルに従って教材を作成するためのオンラインツール>
2023 年 11 月 22 日	ID ポータルのご案内：作業支援ツール<授業設計マニュアル特設ページ>
2023 年 12 月 1 日	<Vol.0127> ID マガジン 第 127 号、発行しました！
2023 年 12 月 27 日	【お願い】ID ポータル利用に関するアンケートへのご協力をお願い
2024 年 1 月 23 日	<Vol.0129> ID マガジン 第 129 号、発行しました！
2024 年 2 月 20 日	ID ポータルのご案内：作業支援ツール<学習設計マニュアル関連ページ>



図：ID ポータルのコンテンツをお知らせする Facebook ページでの投稿の例

関連学会での PR

2024 年 3 月 2 日～3 日に、熊本大学を開催校として日本教育工学会第 44 回春季全国大会が開催されました。認知拡大を目的として、休憩エリアに ID ポータルを告知する A1 版ポスターを配置し、PR に努めました。



図：ID ポータルを PR する A1 サイズのポスター



図：ID ポータルを PR するポスターの会場への設置

ユーザー調査

2023 年 12 月～2024 年 1 月に、ID ポータルに関するユーザー調査を行っています（有効回答数 11 件）。

「ID について情報を得るため」については、「本項目は目的ではなかった」と答えた者はおらず、回答者全員が「達成したと思う」もしくは「少し達成したと思う」と答えています。その他の項目については、「本項目は目的ではなかった」と答えたものが一定数いるものの、「ID に関連するイベントの情報を得るため」については過半数が「達成したと思う」と答えるなど、肯定的な回答が多い傾向にあります。

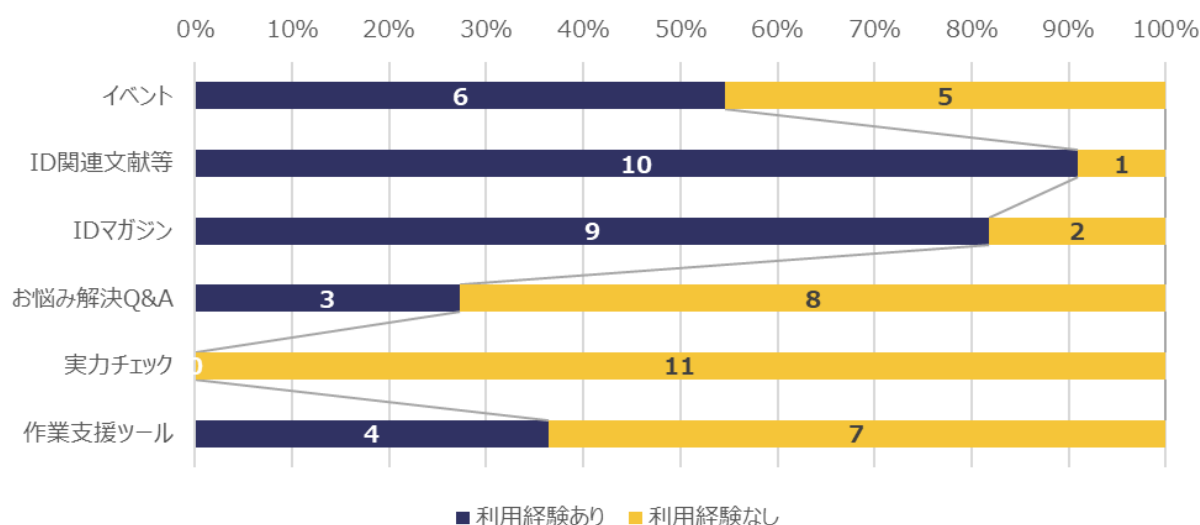
表：ID ポータルへアクセスした目的とその達成度（ID ポータルに関するアンケート）

	本項目は目的ではなかった	達成したと思う	少し達成したと思う	どちらとも言えない	あまり達成しなかったと思う	達成しなかったと思う
ID について情報を得るため	0	9	2	0	0	0
業務や授業での悩みを解決するため	3	3	4	1	0	0
研究のアイディアを得るため	2	5	1	2	0	1
ID に関連するイベントの情報を得るため	3	6	1	0	0	1

回答者のコンテンツ毎の利用経験は、以下のようになっています。ID 関連文献等や ID マガジン、イベントといったコンテンツにおいて過半数が「利用経験あり」と答えています。これらは比較的更新頻度の高いコンテンツであり、気軽に閲覧できる内容でもあります。こうしたコンテンツをきっかけにしながら、お悩み解決 Q&A、実力チェック、作業支援ツールへの遷移を促す施策も有効かと思われます。

表：ID ポータルで利用経験のあるコンテンツ（ID ポータルに関するアンケート）

	イベント	ID 関連文献等	ID マガジン	お悩み解決 Q&A	実力チェック	作業支援ツール
利用経験あり	6	10	9	3	0	4
利用経験なし	5	1	2	8	11	7
合計	11	11	11	11	11	11



本アンケートは本年から ID マガジン経由以外でも回答を募集しました（SNS の活用）。そのため、回答者のすべてが ID マガジンの利用経験があるという状況ではありませんでした。そのため、本アンケートの回答者 11 名のうち 2 名は「ID マガジンの利用経験がない」と答えています。「メルマガ登録」という作業をユーザーに求めるため、ID マガジンの登録者は、インストラクショナルデザインに深い関心がある熱心なユーザーと推測されます。インストラクショナルデザインの認知を広げていくには、その登録以前の状況にあるライトなユーザーにもリーチしてゆき、そうしたライトなユーザーに徐々に熱心なユーザーになってもらうような施策が必要になります。ID マガジンは登録者にプッシュ的に情報を送る機能をもつため、ユーザーが定期的に ID ポータルに訪問しなくても情報が届けられることがメリットです。SNS で広く新しいユーザーにリーチし、ID ポータルを閲覧後「ID マガジンの購読をしてみよう」と思わせる工夫が求められます。

ID ポータルのコンテンツの連携を意識して、SNS を運用していくことで、まずはライトなユーザーになってもらい、徐々にインストラクショナルデザインに関心を深めていってもらうという流れを意識して、ID ポータルおよび SNS 活用をしていくことが必要になると考えます。

共同利用拠点事業③ 公開科目

本センターでは、教授システム学専攻の大学院科目の一部をウェブサイトで公開し、一般の方々にも、広く学修の機会を提供しています。

本年度の取り組みの概要

現在、7 科目 9 コースを公開科目として提供しています（科目名等は下記「公開科目一覧」を参照のこと）。本年度は、新コースのリリースはありませんでしたが、公開科目一覧ページ（<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/outgoing/opencourses/>）を訪問したユーザーが、コース内容を一覧で把握しやすいように、コースごとに概要やゴール、評価基準を記載する修正をしました。あわせて今後の見直しのためのデータ収集の準備を進めました。

アクセス解析ツールとして昨年導入した Google アナリティクス のバージョンアップを行い、最新の Google アナリティクス 4 (GA4) での計測を開始しました。今後も、単純なページビューなどのデータのみならず、訪問数や訪問のきっかけ等、訪問者（学習者）のニーズがわかるようなデータを取得できます。

以下に示すデータは Google アナリティクス 4 からのものとなります。今後も、こうしたデータを参照し、学習者のニーズに沿った科目展開やコース修正に活かす方向で進めてまいります。

公開科目一覧

【博士前期課程】

特別研究 I（2007 年度版）：日本語版 ・ 英語版

研究の第一段階に位置づけられた科目

基盤的教育論（2007 年度版）：日本語版 ・ 英語版

教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目

e ラーニング概論（2009 年度版）：日本語版 ・ 英語版

e ラーニングを教育に導入するための基礎科目

基盤的情報処理論（2010 年度版）：日本語版 ・ 英語版

（2016 年度版）：日本語版 ・ 英語版

e ラーニング教材の開発に必要な情報処理基礎知識（特に Web 活用）の修得を目指す科目

インストラクショナル・デザインⅡ（2014 年度版）：日本語版・英語版

e ラーニングを組み入れた教授システムの青写真と導入プロセスの提案、現状システムの改善計画の提案ができるようになることをめざす科目

経営学特論（2016 年度版）：日本語版

企業・組織内の人材育成や教育について構想・企画・検討するための基礎を培う科目

【博士後期課程】

教授システム学研究総論（2015 年度版）：日本語版 ・ 英語版

博士後期課程の導入科目として位置づけられた科目

公開科目トップページ・各科目へのアクセス状況

公開科目トップページ (<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/outgoing/opencourses/>) ・ 各科目に対するアクセス状況は以下の通りです。なお、本年度から前述の Google アナリティクス 4 を利用したデータ収集・分析を開始しました。昨年度とデータの取得方法が異なるため従前のデータとの比較は行えませんが、本年度のデータを紹介します。

※公開科目トップページへのアクセス状況として閲覧された回数（ページビュー数）と訪問者数を示し、各科目ページへのアクセス状況は公開科目トップページで該当する科目がクリックされた回数を示します。

公開科目トップページの閲覧状況

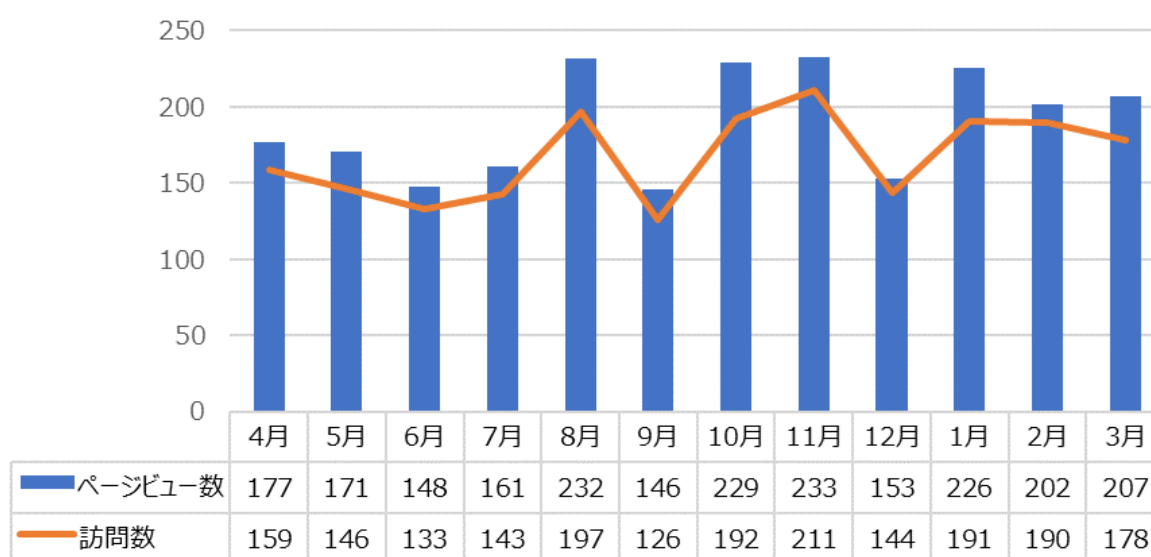


図 公開科目ページの閲覧状況（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

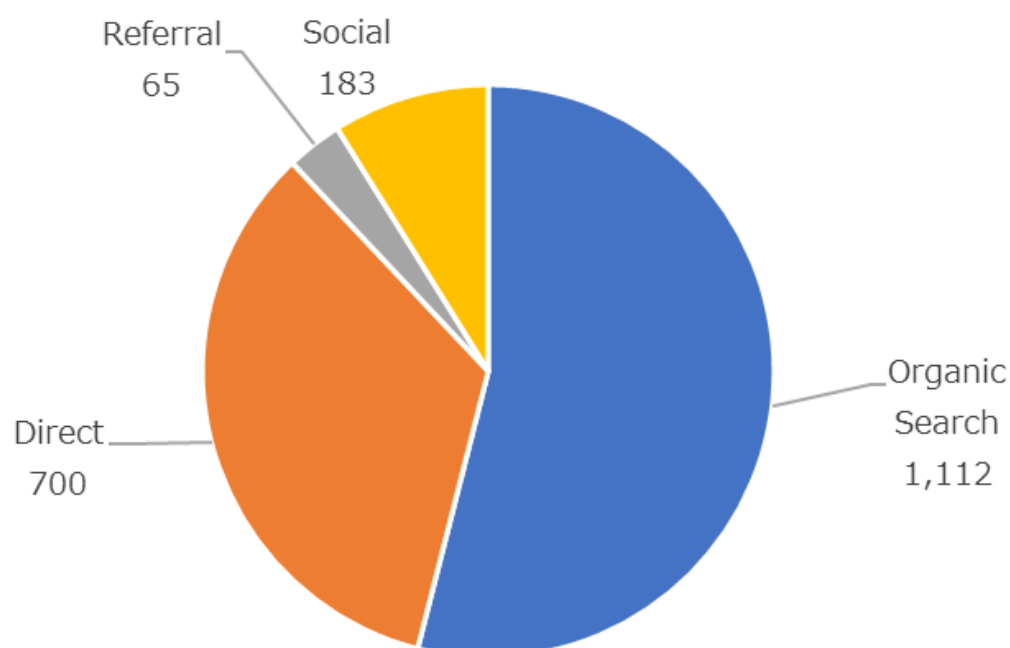
表 公開科目ページから各科目ページへの遷移数（2023 年 4～2024 年 3 月）

科目名	クリック数
特別研究 I（2007 年度版） ※HTML 版のみ提供	160
基盤的教育論（2007 年度版） ※HTML 版のみ提供	135
e ラーニング概論（2009 年度版） ※HTML 版のみ提供	133
基盤的情報処理論（2010・2016 年度版） ※2010 年度版は HTML、2016 年度版は Moodle 版	(2010 年) 54 (2016 年) 29
インストラクショナル・デザイン II（2014 年度版） ※Moodle 版のみ提供	125
経営学特論（2016 年度版） ※Moodle 版のみ提供	82
教授システム学研究総論（2015 年度版） ※Moodle 版のみ提供	87

次の表は、教授システム学専攻ウェブサイト（<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>）を訪れた訪問（セッション）のうち、公開科目トップページを閲覧した訪問（セッション）のみを抜き出して、どのようなきっかけで発生したかを確認したものです。検索エンジン経由（Organic Search）がもっとも多く、URL 直接入力やブックマーク経由等（Direct）が主となっています。

表 公開科目トップページを閲覧した訪問（セッション）のきっかけ（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

	ユーザー	セッション	ページ/ セッション
全体	1,683	2,055	7.71
Organic Search	906	1,112	8.44
Direct	610	700	2.31
Referral	53	65	7.51
Social	151	183	2.31



図：公開科目トップページを閲覧した訪問（セッション）のきっかけの割合（セッション数に基づく）（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

昨年から ID ポータルの告知メディアとして Facebook ページの活用を開始していましたが、本年は、Facebook ページにて公開科目の告知を開始しました。これは、昨年度アクセス解析データを分析した結果、「公開科目ページやコンテンツ自体を充実させるも重要ですが、外

部サイトで紹介してもらう機会を設けるといったような外部的な施策も検討する必要がある」との示唆を受けてのことです。自組織の管理下にあるウェブサイトの外にありながらも、自組織でのある程度の主導権を持った活用ができるため、SNS を広報媒体として活用していくこととしました。次の表は、Facebook ページにおける公開科目関連の投稿を一覧にしたものです。1 か月に 1 回程度の頻度で科目を紹介する投稿を行いました。

表：Facebook ページにおける公開科目関連の投稿

投稿日時	内容
2023 年 6 月 12 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」をご存じですか。
2023 年 7 月 12 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」から、科目をピックアップして「e ラーニング概論」をご案内します。
2023 年 8 月 3 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」から、科目をピックアップして「基盤的教育論」をご案内します。
2023 年 9 月 11 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」から、科目をピックアップして「基盤的情報処理論」をご案内します。
2023 年 10 月 18 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」から、科目をピックアップして「インストラクショナル・デザイン II」をご案内します。
2023 年 11 月 8 日	熊本大学大学院教授システム学専攻が提供する「公開科目」から、科目をピックアップして「経営学特論」をご案内します。



図：公開科目を紹介する Facebook ページでの投稿の例

その結果、表「公開科目ページへのユーザー数・訪問数（全体・SNS）」でお示しするように SNS 投稿をした月には SNS 経由で訪問するユーザーや訪問が増える傾向となりました。今後も公開科目を伝える投稿を続けていく予定です。

表 公開科目ページへのユーザー数・訪問数（全体・SNS）（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

月	全体		SNS 経由	
	ユーザー数	訪問数	ユーザー数	訪問数
4 月	133	149	0	0
5 月	120	135	1	1
6 月	141	162	28	28
7 月	150	160	18	20
8 月	204	236	50	53
9 月	112	127	11	11
10 月	199	223	34	37
11 月	183	219	16	18
12 月	117	137	2	3
1 月	146	179	4	5
2 月	165	183	4	6
3 月	157	174	1	1

関連学会での PR

2024 年 3 月 2 日～3 日に、熊本大学を開催校として日本教育工学会第 44 回春季全国大会が開催されました。認知拡大を目的として、受付場所近くのロビーエリアに公開科目を告知する A1 版ポスターを配置し、PR に努めました。



図：ID ポータルを PR する A1 サイズのポスター



図：公開科目を PR するポスターの会場への設置

共同利用拠点事業④ 講師派遣

本センターではインストラクショナル・デザインについて学ぶ機会を
提供するために、講師派遣をしています。

本年度の取り組みの概要

昨年度に引き続き「FD 研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣」の継続・拡大を図りました。他の取り組みとも連携しつつ、可能な限り、受講者参加型の FD 研修を実施しました。本年度は、対面とオンラインを組み合わせた研修を多く実施しました。オンライン研修では、同期で実施するもの、非同期でオンデマンドの動画を提供し事前に質問を受け付け、当日の質問と合わせ回答しながら進める研修や、ビデオ会議システムの小グループ用会議室機能を活用した受講者間での協調学習などを含む多様な形態で提供しました。また、受講者に対し、研修前後の非同期学習を体験してもらうことで、自己調整学習を意識した授業設計と実施を促進するための FD に寄与しました。

講師派遣として本拠点所属教員として、2 名の半導体・デジタル研究教育機構教授システム学教育実践力開発拠点の教員が、講師として、大学教職員対象の研修を 4 件、その他を対象とした研修を 3 件、のべ、7 件行いました（表 1 参照）。昨年度は、所属教員を講師として大学教職員対象の研修を 17 件、その他を対象とした研修を 14 件、のべ 31 件でした。昨年度と比較すると、のべ件数としては 24 件少ない状態です。本年度は、昨年度末に ID 分野の 3 名の教員が本拠点を去り、教員の補充がなされなかった影響により、所属教員による研修数が減少しました。

一方で、本年度より名誉教授となった元所属教員による研修数は 16 件でした（表 2 参照）。以下でご報告する受講者数は名誉教授による講師派遣を含みませんが、小規模な研修から規模の大きな講演まで、対象者としては大学教職員、大学院生、医療関係者や一般の方などを対象とし、多様な研修を行いました。

本年度の大学教職員対象の研修では、のべ 1282 名が本拠点所属教員の研修を受講しました。

一般・その他の研修では、対象者を設定していない一般を対象とした研修、その他として、専門学校教員、医療関係者対象の研修について整理しました。一般・その他の受講者は 45 名で、本年度の所属教員による講師派遣の全受講者数は、1327 名でした。

所属教員と名誉教授による研修の内容は、授業設計、教材設計はもちろん、人材育成、学習環境と学習経験、言語教育や安全講習の改善等、多岐に渡りました。研修の規模も、10 数名の研修から、300 名を超える研修がありました。主催者も、大学だけでなく、企業、各種財団、学会等で、それぞれの団体のミッションや課題に合わせ、研修を行いました。

また、本年度は、講師派遣事業の業績向上を目指し、「熊本大学 e ラーニング連続セミナー」としてセミナーを 4 回開催しました（表 3 参照）。オンライン協調学習や STEM 教育、人工知能等の専門性を持つ国内外の著名な e ラーニングの専門家を講師を招き、e ラーニングを活用した教育実践、大学教育、授業改善に寄与し、本拠点所属教員の研鑽も目的とするセミナーを開催しました。対面とオンラインを併用するハイブリッドな開催で、4 回のセミナーの参加者数は 145 名でした。この連続セミナーは教授システム学専攻の Facebook で告知し、ID の普及や当該セミナーの内容を知る契機となるよう、積極的な情報発信に努めています。



図：熊本大学 e ラーニング連続セミナーを告知する Facebook 投稿

本年度も、依頼者のニーズに合わせ、受講者がより能動的で積極的に参加できる研修を提供してきました。次年度も、さらに、受講者が自ら学ぶ研修、研修後も学び続けられるような研修を提供していきたいと考えています。また、今後も、定年退職し、専攻の客員教授となられた、多様な専門性を持つ有識者の協力を得ながら、講師派遣の更なる充実を図りたいと考えています。

表 1：講師派遣の事例（本拠点所属教員による）

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 (オンラインは同期)
2023/9/5	合田美子	九州大学ラーニングアナリティクスセンター	第2回シンポジウム「生成系AIとラーニングアナリティクスによる新たな教育学習支援の可能性」	九州大学伊都キャンパス、オンライン
2023/11/10	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和5年度文部科学省委託事業 授業改善サポーター養成講座 研修1	JR博多シティ会議室
2023/11/14	合田美子	九州大学データ駆動イノベーション推進本部	国際共同研究シンポジウム「デジタル社会における学習環境デザイン～データ駆動型学習環境における学びとその支援をどのようにデザインすべきか?～」	九州大学伊都キャンパス、オンライン
2023/12/1	合田美子	大手前大学学修サポートセンタース	大手前大学学修サポートセンターススタッフ勉強会	大手前大学学修サポートセンター
2023/12/11	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和5年度文部科学省委託事業 授業改善サポーター養成講座 研修2	オンライン

2024/1/10	合田美子	全国専門学校教育研究会	令和 5 年度文部科学省委託事業 授業改善サポーター養成講座 研修 3	オンライン
2023/12/19	喜多敏博	国立情報学研究所	大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「GPT でオンライン学習教材を自動生成する試み」 https://edx.nii.ac.jp/lecture/20231219-05	オンライン

表 2：講師派遣の事例（名誉教授による）

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 （*オンラインは同期）
2023/6/22	鈴木克明	一般社団法人ピープルアナリティクス&HR テクノロジー協会	関西 WG/ラーニング&アナリティクス WG 共催 2023 年度第 2 回セミナー	アットビジネスセンター大阪本町
2023/6/24	鈴木克明	麻酔科学サマーセミナー事務局	第 19 回 麻酔科学サマーセミナー「麻酔の学びをデザインする」	万国津梁館
2023/9/12	鈴木克明	帝京大学	ラーニングテクノロジー開発室 20 周年記念シンポジウム「ICT 活用がもたらす教育のアップデート」	帝京大学宇都宮キャンパス
2023/9/14	鈴木克明	松山大学	松山大学薬学部 2023 年度 FD 研修会	松山大学
2023/10/11	鈴木克明	京都光華女子大学	令和 5 年度京都光華女子大学健康科学部 看護学科 FD 研修	京都光華女子大学
2023/10/25	鈴木克明	一般社団法人 ICT CONNECT21	「水曜サロン with 赤堀会長」第 5 期第 1 回	オンライン
2023/10/31	鈴木克明	一般社団法人 IT 人材育成協会 (ITHRD)	EXE 宣言セミナー	アルカディア市ヶ谷
2023/11/1	鈴木克明	神田外語大学	FY 2023 KUIS FD Seminar	神田外語大学
2023/11/7	鈴木克明	日本オンライン教育産業協会 / 産経新聞社	オンライン ラーニング フォーラム 2023	ソラシティ、オンライン
2023/11/24	鈴木克明	日本救急看護学会	第 25 回日本救急看護学会学術集会	出島メッセ長崎（長崎市）、オンライン配信

2023/11/26	鈴木克明	INTERNATIONAL CONFERENCE ON EDUCATION AND E-LEARNING	2023 7th International Conference on Education and E-Learning (ICEEL 2023)	大妻女子大学
2023/12/18	鈴木克明	京都光華女子大学	令和 5 年度京都光華女子大学健康科学部 看護学科 FD 研修	京都光華女子大学
2023/12/19	鈴木克明	日本医療教授システム学会	GOLD メソッド認定講座(入門編)	川崎医科大学高齢者医療センター、オンライン
2024/1/10	鈴木克明	京都橘大学	2023 年度 京都橘大学 全学 FD 学習会	京都橘大学、オンライン
2024/2/28	鈴木克明	関東学院大学	関東学院大学 2023 年度 看護学研究科 FD 研修会	関東学院大学
2024/3/1	鈴木克明	熊本県立大学	熊本県立大学全学 FD 研修	熊本県立大学

表 3 : 国立大学法人熊本大学 e ラーニング連続セミナー実行委員会主催のセミナー

研修日	講師	研修名	講演タイトル	研修場所 (*オンラインは同期)
2023/9/19	ジェニファー・リチャードソン博士 前田有希子博士	第 34 回 熊本大学 e ラーニング連続セミナー	Design and Evaluation of Effective Online Collaborative Learning: Application of Community of Inquiry	熊本大学、オンライン
2023/11/18	ステファニ・ティズリー博士	第 35 回 熊本大学 e ラーニング連続セミナー	STEM 教育研究の最前線 - NSF 助成研究プロジェクトの事例から -	熊本大学、オンライン
2024/1/23	Tamás Molnár 氏	第 36 回 熊本大学 e ラーニング連続セミナー	高等教育における人工知能と ChatGPT, Artificial Intelligence and ChatGPT in higher education	熊本大学、オンライン
2024/2/15	H. Ulrich Hoppe 氏 緒方 広明 氏	第 37 回 熊本大学 e ラーニング連続セミナー	データリッチな教育エコシステムにおける教育と学習 Teaching and Learning in a Data-rich Educational Ecosystem	熊本大学、オンライン

派遣事例

講師：合田美子

実施日：2023 年 9 月 5 日(火)13:00~16:05

場所：会場（九州大学 稲盛財団記念館稲盛ホール）、オンライン

研修名：九州大学ラーニングアナリティクスセンター 第2回シンポジウム

「生成系 AI とラーニングアナリティクスによる新たな教育学習支援の可能性」

（後援：データ駆動イノベーション推進本部 ラーニングアナリティクス部門）

参加者：約 360 名

2023 年 9 月 5 日に九州大学の会場とオンラインで開催された九州大学ラーニングアナリティクスセンター 第2回シンポジウム「生成系 AI とラーニングアナリティクスによる新たな教育学習支援の可能性」に登壇しました。本シンポジウムは、教育分野における AI の最新の進歩と応用に関する洞察を共有する場として開催されました。招待講演では、東京大学の吉田 墨先生による AI 技術の概観とその教育への応用に関する示唆に富んだ話があり、生成系 AI を活用した興味深い研究事例が島田先生から紹介されました。また、ラーニングアナリティクスセンターにある IQLab のメンバーから、学生による生成系 AI の利用とその影響に関する調査結果についても報告がありました。これらの発表により、AI と教育の融合を考察する機会になったと思います。



招待講演として、私も、教授システム学の視点から、生成系 AI とインストラクショナルデザインの組み合わせが教育にどのように役立つかを紹介しました。従来のチャットボットの研究を引き合いに出し、対話ベースの学習がいかに学生のエンゲージメントと学習成果を向上させるかを論じました。AI を教育に統合する際は、単に新しい技術を導入するのではなく、学習目標を達成するためにこれらのツールをいかに効果的に活用できるかという点に焦点をあてました。生成系 AI のポテンシャルを最大限に引き出すためには、授業設計が重要であり、このテクノロジーを利用することで教育の

質をどのように向上させるかが鍵となることを強調しました。

このシンポジウムを通じて、生成系 AI が教育に革新をもたらす可能性について深い洞察を得ることができました。特に、対話による学習の強化は、学生の批判的思考能力の促進、創造性の刺激、そして学習内容のより深い理解へと繋がる重要な要素であることを強調しました。技術の進歩を教育の枠組みに統合することで、私たちは学習者にとってより豊かで効果的な学習経験を創出することができると期待します。

講演型 FD 研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案（2021. 3）

本センターでは、これまでに FD 研修講師派遣を依頼頂いた際に、様々な形の研修を提言してきました。外部講師としての依頼を受け、講演をした後で、質疑応答の時間を最後に取り、という従来型のものもありましたが、他のやり方はどうでしょうか、という提案をした結果、それを受け入れていただき、効果が上がったケースもありました。これまでの経験をもとに類型化した研修モデルには、以下のようなものがありました。

＜外部講師講演型＞

重要だと思われるトピックの第一人者を招聘して行う FD。例えば、アクティブラーニング、パフォーマンス評価、オンライン授業など。講師によっては、新しいコンセプトを事例に即して知る機会になることもあるが、力量に依存するので、「お勉強」に留まり実際の授業改善には直結しない場合も散見される。講演の最後には質疑応答の時間を設ける場合もあるが、質問があまり活発に出ずに FD 担当者が困るケースも多い。

＜事前質問付外部講師講演型＞

外部講師を派遣する際に、事前に質問を受講予定者から募り、その回答を含めた講演にしよう。講演時間の半分程度を講演にあて、残りの時間を事前質問への回答にあててもらうのが効果的。ケースによっては、事前質問への回答を最初にしてから、まとめの講演というパターンがより講演を身近に感じられ、満足感を高めることもある。

＜事前資料付講演（反転授業型）＞

基本的な内容については事前に論文や講義ビデオで情報を得てもらい、その上で当日の講演に臨んでもらう。可能であれば、事前資料についての質問を事前にあるいは参集時に受付で出してもらい、講演時間は事前資料の内容についての質疑応答を中心に構成するか、ワークショップ的に例えば「事前資料の内容を今後の担当授業にどう応用するか」を検討する時間とする。担当科目でもこの形式（反転授業）を採用してもらう布石として学習者として体験してもらい意図も兼ねて行う。

＜講演型＋アクションプラン作成＞

次回にアクションプランをどう実現したかをシェアする会を設定・予告し、それまでに活用することに誘う。新しいコンセプトを導入した後で、個人あるいはグループ（担当科目やカリキュラムを共有する者同士）で、このコンセプトをどのように活用して授業を改善できそうかを検討・議論し、アクションプランを作成する（次回の FD まで、今年度中、2－3 年後までには、など）。

＜事前課題＋アクションプラン作成＞

FD 開始前に授業改善のヒントとなるような文章を全員が読んで、疑問点や自分の授業改善にどのように活用できそうかを検討した結果を持ち寄ってもらう方式。集まった時には疑問点を解消した後で、各自の検討結果を共有し、互いに気づいてなかった点を加えてアクションプランを作成して、次回につなげる。

＜まな板の鯉方式＞

これまでに様々な工夫をして授業改善に取り組んできた教員の事例を紹介してもらい、自分の授業で参考になる点（まねできそうな点）や更なる改善アイデアについて小グループで

話し合い、授業提供者が持ち帰るお土産とする。例えば、ICT 活用法、遠隔授業構成法、学習意欲を高める方策などのテーマを設定し、関連する工夫を数例並べて検討するとさらに効果が高まる。

＜ワークシート形式＞

各自が担当する授業について共通のフォーマットを用いて現状分析し、改善の糸口を見つける方式。ARCS で学習意欲を向上する、大学の授業点検シートで出入口と方略をチェックするなど。ワークシートへの記入を事前課題として記入済みのものを持ち寄って議論中心に展開すると効率的になる。さらにアクションプラン作成と組み合わせて次回につなげることも効果的。代表的な取り組みを次にまな板の鯉方式で共有することにつなげる前段階としての活用するのもよい。

＜他のやり方＞

本センターでは、講師派遣に際して、その他にも有効だと思われるやり方を模索していきたいと考えています。遠慮なくご相談ください。

共同利用拠点事業⑤ オンラインプログラム

本センターでは 2019 年から、
授業設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム」
を公開しています。

本年度の取り組みの概要

文部科学省の履修証明制度に基づくプログラム

募集期間 6月30日(金)～8月7日(月)
教育改善スキル修得オンラインプログラム
自律学習支援編 有料版受講者 (第3期) 募集のお知らせ

文部科学省の履修証明制度に基づくプログラム

受講期間 11月20日(月)～3月15日(金)
募集期間 8月10日(木)～9月20日(水)
教育改善スキル修得オンラインプログラム
科目デザイン編 有料版受講者 (第9期) 募集のお知らせ

【受講者募集】教育改善スキル修得オンラインプログラム (自律学習支援編) 有料版受講者 (第3期) 募集のお知らせ
<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~announcements/>
熊本大学で、無料版公開中の「教育改善スキル修得オンラインプログラム (自律学習支援編) <https://kyoten1.cica.jp/moodle2/>」の有料版受講者 (第3期) を募集中。皆様の応募をお待ちしております。

【受講者募集】教育改善スキル修得オンラインプログラム (科目デザイン編) 有料版受講者 (第9期) 募集のお知らせ
<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/2023onlineprogram04/>
熊本大学で無料版公開中の「教育改善スキル修得オンラインプログラム (科目デザイン編) <https://kyoten1.cica.jp/>」の有料版受講者 (第9期) を募集中。皆様の応募をお待ちしております。...

図：Facebook 投稿による PR

図：YouTube による PR https://youtu.be/JSQ5rIS_jZI

表：参加者募集告知ページの閲覧状況（8 期）

	科目デザイン編 8 期固定ページ			科目デザイン編 8 期投稿ページ		
	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー
4 月	47	38	27	54	42	21
5 月	6	6	2	12	10	0
6 月	13	3	0	5	4	0
7 月	2	2	1	3	2	0
8 月	2	2	0	3	2	0
9 月	4	3	2	2	2	0
10 月	2	1	0	1	1	0
11 月	1	1	1	1	1	0
12 月	0	0	0	1	1	0
1 月	0	0	0	0	0	0
2 月	4	3	0	2	1	0
3 月	0	0	0	1	1	0
総計	81	56	33	85	64	21

表：参加者募集告知ページの閲覧状況（9 期）

	科目デザイン編 9 期固定ページ			科目デザイン編 9 期投稿ページ		
	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー
4 月	0	0	0	0	0	0
5 月	0	0	0	0	0	0
6 月	0	0	0	0	0	0
7 月	0	0	0	0	0	0
8 月	21	9	3	30	19	0
9 月	6	5	2	14	13	0
10 月	4	2	0	17	14	0
11 月	1	1	0	10	6	1
12 月	0	0	0	3	3	0
1 月	3	3	1	7	7	0
2 月	6	2	0	6	4	0
3 月	1	1	0	0	0	0
総計	42	19	6	78	58	1

表：参加者募集告知ページの閲覧状況（3 期）

	自律学習編 3 期固定ページ			自律学習編 3 期投稿ページ		
	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー
4 月	0	0	0	0	0	0
5 月	0	0	0	0	0	0
6 月	2	1	0	1	1	0
7 月	54	33	17	33	27	5
8 月	8	5	1	7	6	0
9 月	0	0	0	1	1	0
10 月	4	2	0	2	2	0
11 月	1	1	0	1	1	0

12 月	0	0	0	0	0	0
1 月	1	1	0	3	3	0
2 月	2	1	0	3	1	0
3 月	0	0	0	1	1	0
総計	72	39	18	52	41	5

本取り組みでは、高等教育機関の授業における学習目標、評価方法、授業方法の設計に関する知識・スキルを身につけるためのオンラインプログラム（科目デザイン編）の運営を行っています。

基礎からの積み上げ方式による暗記から始まる専門家育成の枠組みを脱却し、学習の有用性が最初から感じられる科目デザインを実現することが社会人の学び直しにも有効であり、かつ社会人経験がない学生にとっても有用であることを前提としています。

本年度は有料版の第 8 期と第 9 期を募集し、3 名の受講者が修了しました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

ANNOUNCEMENTS undefined

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

モジュール 1：大学教育に関する 5 つの物語

モジュール 1 では、高等教育に関する 5 つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論しましょう。

アクセスする
アカウントなしで閲覧可能

モジュール 2：認知的発達を促す授業方法

モジュール 2 では、『バラレセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。

アクセスする
要ログイン

モジュール 3：評価と単位認定の見直し

モジュール 3 では学習の評価について学習します。期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった問題について学習します。

アクセスする
要ログイン

モジュール 4：学習目標の高度化

モジュール 4 では、学習目標について学習します。『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といったトピックについて学習します。

アクセスする
要ログイン

ナビゲーション

ホーム画面へ戻る

進捗管理画面へ戻る

学習状況証明書を発行
(無料ユーザー向け)
証明書はいつでも発行可能

学習状況証明書を発行
(有料ユーザー向け)
有料ユーザーのみアクセス可能。証明書はいつでも発行可能。

関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCIS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 創造学研究院 教授システム学専攻
社会文化科学研究科 教授システム学専攻

ご意見はこちら

本プログラムを学習していてお気づきの点、ご意見がございましたら、下記のボタンよりご連絡ください。

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

オンラインプログラムでは、大学の授業設計について、主に学習目標、評価方法、授業方法の 3 点から学習し、学習した内容を元に、自身が所属機関で担当している授業を修正します。また、ミネルバ大学の事例等を紹介し、今後の大学についての考え方についても議論します。

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができましたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては 2 回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール 1 大学教育に関する 5 つの物語	無料版 有料版	高等教育に関する 5 つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論します。
モジュール 2 認知的発達を促す授業方法	無料版 有料版	『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。
モジュール 3 評価と単位認定の見直し	無料版 有料版	期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった評価に関する問題について学習します。
モジュール 4 学習目標の高度化	無料版 有料版	『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といった学習目標に関する問題について学習します。
モジュール 5 最終課題	有料版	モジュール 1 からモジュール 4 で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

アクセス数

2023 年 3 月から 2024 年 2 月までの訪問者数（IP アドレス）については現在集計中です。各モジュールの無料版プログラムの学習を修了し、デジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数（IP アドレス）			無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数		
	2021	2022	2023	2021	2022	2023
モジュール 1：大学教育に関する 5 つの物語	343	304	353	22 名	12 名	11 名
モジュール 2：認知的発達を促す授業方法	103	38	46	13 名	5 名	4 名
モジュール 3：評価と単位認定の見直し	53	23	28	15 名	6 名	5 名
モジュール 4：学習目標の高度化	60	22	29	12 名	4 名	5 名

有料版プログラム

有料版では、各モジュールでの学習を進めながら、実際に所属機関で担当している科目（大学院生の場合は将来担当したい科目）を改善していきます。有料版プログラムには以下の特徴があります。

<特徴 1：相互レビューに基づく学習>

本プログラムでは各モジュールで提出する課題等はすべて、他の学習者との相互レビューを行いながら、質の改善を行っています。

<特徴 2：ポートフォリオの活用>

本プログラムでは、各モジュールで提出する課題や自身の科目のシラバス等をポートフォリオにまとめるお手伝いをしています。そのポートフォリオを相互レビューや対面ワークショップ等で他の学習者と共有します。最終的にはポートフォリオを誰でも閲覧可能な形で公開できるようにして、発行される履修証明書と併せて、学習者自身のキャリアアピール等で活用していただくことを想定しています（公開は任意）。

<発行される証明書>

本プログラムでは、すべての学習を完了し、最終期限日までに合格することで文部科学省の制度に基づいて熊本大学から履修証明書（紙媒体・デジタル媒体）が発行されます。学習途中でも（無料版でも）学習状況証明書（デジタル媒体）が発行されますが、これは文部科学省の履修証明制度に基づくものではありません。

また、履修証明書（デジタル媒体）には任意で本プログラムで作成を支援するポートフォリオへのリンクを埋め込むことができ、将来、自身の学習についてアピールする際に活用することができます。



図：履修証明書（デジタル版）

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編（第 7 期・8 期）の直前アンケート（修了者 5 名のうち 3 名（バッジ取得者のうち 60%））と 1 カ月後アンケート（修了者 5 名のうち 2 名（バッジ取得者のうち 40%））を実施し、以下、1）～5）の設問に対する回答を求めました。

1) オンラインプログラムの印象について

オンラインプログラムの内容について注意、関連性、自信、満足度の度合いについて 7 段階で回答を求めました。注意、関連性、満足感については、全ての受講者が 6 や 7 と回答し、その理由として、「ID にとても興味があったし、具体的にどう授業を改善できるか興味があったから」、「学生に自主性を持ってほしいと感じていたが、感じている自分が学生に自主性を持てるような授業や取り組みを全くしていないことに気がついたから」、「知らないことを具体的に知ることができたのが面白かったから」、「小テストも合格できずに、学習途中に挫折しそうにもなった。しかし、繰り返して学習し、テストに合格したときには、合格したというだけではなく、関連する項目の理解が深まっていることが実感できたから」、「具体的に自分の授業をよりよくする工夫を加えることができたと感じるので」などの回答がありました。また、自信については、2 名の受講者が 4、1 名の受講者が 7 と回答し、他の項目よりはやや低い数値を示しましたものの、「自信が持てたとまでいえるレベルにないと感じているものの、理解できる部分は確実に増えたので」、「だいぶ自信が持てました」等の回答を得ました。

2) 各モジュールでの説明、クイズ等で何か改善してほしい点があれば教えてください。

「最初の 5 回だけの事前課題は努力と真剣さを要求の解答が「利用なし」だったが、このコメントを詳しく書いていただきたかった」、「設問の表現の問題かもしれないが、どの科目も分かりにくさを感じた」など、モジュール 2 の力試しテストに関する回答が見られました。これらの意見を踏まえ、力試しテストの修正に取り掛かりました。すでに修正作業は完了していますが、現在、学習を進行している受講者の意見を確認後、今後の修正の可否について検討します。

3) 学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習進捗にとって役に立ちましたか？

3 名中、3 名の回答者が「役に立った」と回答し、その理由として、「働きながらの学習では、やはり仕事が優先となってしまうがち。学習を促すメールが来ることは、学習を再開する動機づけになった」、「期限について意識できたからよかった」、「日頃の業務に紛れて置き去りにしていた部分が大きく、大変助かりました」等の回答を得ました。

4) 修了証明書（電子版）は今後、どのような目的で利用しますか？

2 名中、1 名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」、「自身の学びを振り返るために利用する」目的で修了証明書（電子版）を利用すると回答しました。

5) ポートフォリオの利用目的を教えてください。

2 名中、2 名の回答者が「自身の学びを振り返るために利用する」目的でポートフォリオを利用すると回答しました。

6) 本プログラムの学習で身についたと感じた知識・スキルと感じたものがあれば教えてください。

本プログラムの学習を通し、受講者がどのような知識・スキルが身についたと感じているのか、その一部を紹介します。

- 私は、教育制度・政策について研究し、その開発・改善を本務としてしていますので、直接、授業科目の実施に携わることがあまりありません。しかし、今回、先進的な科目デザインの取組を経験することで、授業科目を担当する教員の活動を支援する仕組みを構築する際に、どのような行動を引き出したいのか、そのためにどのような情報を提供し、どのようなツールを準備すればよいかについて考える、貴重な知識基盤を得ることができました。
- プログラムの構成を moodle 上で把握すること。まだまだ不足しているが、全体像がどのようになっているのか、わからないまま放置するのではなく、最後までやり遂げられたことは、スキル向上につながったかと思います。
- 目的達成に最も寄与したのは、各モジュールの最終課題で、「現状分析と行動計画（記入シート）」を記入したことである。シートは、それぞれの学習内容別に整理されたものになっており、要素別に丁寧に振り返ることができた。記入には時間もかかり、わからないことや迷うことが多くあったが、このことこそが理解を深める体験であったと感じている。また、これをもとにコメントをフィードバックいただいた。これをもとに、再度最終課題と照らし合わせて読み直す、考え直すことができた。このことが非常に満足度の高いものであったと感じている。

6 ヶ月後追跡調査の結果（有料版）

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編（7 期）の 修了者を対象とした 6 ヶ月後追跡調査（修了者 2 名のうち 1 名（バッジ取得者のうち 50%）では、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか（記憶度）、また受講後の業務にどの程度役立っているか（有益度）についての回答を求めました。記憶度について、モジュール 1 ～ 4 ほとんどの項目で「覚えている」「少し覚えている」と回答し、「覚えていない」が過半数を超える項目はありませんでした。有益度について、モジュール 3 の「評価と単位認定の見直し」については、「役に立っていない」の回答が過半数を超える結果となりましたが、モジュール 1、2、4 ではほとんどの項目で「役立っている」、「少し役立っている」と回答し、「役に立っていない」が過半数を超える項目はありませんでした。

＜6 ヶ月後追跡調査結果概要（2023 年 9 月（第 7 期）実施分＞

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1 ヶ月の計画では、具体的なアクションを実行していたが、3 ヶ月、6 ヶ月では計画を実践できなかったと回答しました。行動に移せなかった理由を見てみると、「自分の科目に必要な DP を確認することは出来ました。しかし、「医学部に必要な授業設計」については検討課題が莫大であり最終的な結論が出ませんでした」、「自分の授業範囲では検討することができたのですが、科目全体を通して検討するには多くの人を巻き込まなければならないためになかなか進みませんでした」のように、計画の遅れが理由として挙げられていました。オンラインプログラムで学んだことをもとに、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。

表：6 ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果
LMS（Moodle）を使い事前課題動画をアップし、閲覧後に確認テストを行い（合格点になれば何回も回答可能）を行い、知識を均霑化し授業に臨めるようにした。	学生の「今日の授業がよく分からない」とか「何をしたいのか分からない」という発言が減った。

プレ FD での受講者アンケート結果

熊本大学では、学内の大学院生を対象にプレ FD を実施しました。プレ FD では、科目デザイン編のコンテンツを使用し、受講者に学習を進めてもらいました。2023 年度は 3 名の受講者が修了しました。

募集期間	10 月 10 日（火）～11 月 7 日（火）
学習期間	2023 年 11 月 20 日（月）～2024 年 3 月 15 日（金）
対面学習	1 回目：2023 年 12 月 9 日（土）、2 回目：2024 年 1 月 24 日（水） 3 回目：2024 年 2 月 11 日（日）

受講者に学習目標、評価方法、授業内容の順序で学んでもらうために、科目デザイン編のモジュール 1 からモジュール 4 の学習を以下のような順序に変更して実施しました（各モジュール学習内容の変更はありません）。

科目デザイン編			プレ FD		
学習 順序	モジュール	テーマ	学習 順序	モジュール	テーマ
1	モジュール 1	大学教育に関する 5 つの物語	1	モジュール A	学習目標の高度化
2	モジュール 2	認知的発達を促す授業方法	2	モジュール B	評価と単位認定の見直し
	モジュール 3	評価と単位認定の見直し	3	モジュール C	認知的発達を促す授業方法
	モジュール 4	学習目標の高度化	4	モジュール D	大学教育に関する 5 つの物語

※科目デザイン編有料版では、モジュール 1 学習終了後、モジュール 2～4 の学習順序については、受講者の意思に任せているが、プレ FD では指定した順番で学習を進めるようにした。

＜受講修了後アンケート調査結果概要（2024 年 2 月実施分）＞

2023 年度熊本大学プレ FD の受講修了後アンケート（修了者 3 名のうち 3 名）を実施し、以下、1）～2）の設問に対する回答を求めました。

1) オンラインプログラム（プレ FD）の印象について

プレ FD の内容について注意、関連性、自信、満足度の度合いについて 7 段階で回答を求めました。注意、関連性、満足感については、全ての受講者が 6、または 7 と回答しました。また、自信については、各受講者それぞれ 4、5、6 と回答し、他の項目と比べやや低い数値を示しました。各設問の回答理由は以下の通りです。

A：注意	・大学教員を目指すにあたって、授業設計の仕方や考え方を初めて学ぶことができた。 ・自分が担当している授業を振り返りながらタイムリーに学ぶことができました。
R：関連性	・将来、自身が受け持つ講義を想定してどのように講義を構成するかを考えることができた。また、そのために知識について学ぶことができた。 ・学習目標をはじめ、これからも授業デザインの学習を進めながら身近なところから関連させていこうと思います。 ・自分で計画した授業計画を、実施することを想定して修正できて、主体的に取り組むことができたため。
C：自信	・今回得られた知識をシラバスに落とし込んだり、応用したりするには経験や実践が足りないと感じた。 ・一つ一つの意味の理解がまだ十分ではない。 ・まったく授業のやり方などについて知らなかったが、内容を具体的に考えたことで、身近な問題としてとらえることができ、理解が深まったから。
S：満足感	・将来、教員を目指すうえで、自身のすべき仕事内容や講義作りに対するイメージを明確にすることができた。 ・本当に勉強になりました。ぜひ活用していこうと思います。 ・今まで受けてきた、また、想定していた授業の形とかなり違う内容も多く、自身の授業への考え方が大きく変わったため。

2) 受講希望の理由と目標達成性

プレFDの受講理由として、2名の受講者が「自身のキャリアのため」、1名の受講者が「自身が受け持つ（予定の）科目改善のため」と回答しました。受講理由の達成に最も寄与した学習内容について、「モジュールDの内容、とがった内容だったが自分でも賛成か反対か考えさせられた」、「学習目標の高度化」、「学修目標や授業方法の設定に関する考え方」との回答を得ました。また、本プログラムの学習で身についたと感じた知識・スキルに関して、「教員が講義を構成する上での心構えや求められる資質について」、「学生が主体的に学ぶには興味を持って自己学習できるような仕掛けづくりが必要」、「グループで質問考えたり、授業計画を指摘しあったり、スキルが向上した」との回答を得ました。

「自律学習支援編」の有料版運用開始

履修証明制度による講座提供を開始した「科目デザイン編」の続編として、「自律学習支援編」の提供を開始しました。大学生の自律的な学びを支援するために授業にどのような要素を盛り込むことができるかについて、様々な ICT 活用のヒントを提供するとともに、『学習設計マニュアル』を教員の立場から読み進めていくというコンセプトで整備を進めてきました。令和 2 年度に無料版を公開し、本年度は、有料版第 3 期を募集し、2 名の方が修了されました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle2/>

日本語 (ja) ログイン

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

モジュール 1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる

モジュール 1 では、学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための 7 つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみましょう。

アクセスする
要ログイン

*旧モジュール 1「大学教育に関する 5 つの物語」はこちら

モジュール 2：自学自習を促す ICT 活用

モジュール 2 では、学習者に自学自習を促すために ICT で何ができるのか、その手段を学び、実際に ICT を導入した授業設計ができるように学びます。

アクセスする
要ログイン

モジュール 3：学生が学び合う場をつくる

モジュール 3 では学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。

アクセスする
要ログイン

モジュール 4：学生を自己調整学習者に育てる

モジュール 4 では、学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのが設計できるように学びます。

アクセスする
要ログイン

ナビゲーション

ホーム画面へ戻る

進捗管理画面へ戻る

学習状況証明書を発行（無料ユーザー向け）
証明書はいつでも発行可能

学習状況証明書を発行（有料ユーザー向け）
有料ユーザーのみアクセス可能です。

関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCIS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

ご意見はこちら

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

科目デザイン編同様、無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1 学生が自分の学びと向き合う きっかけをつくる	無料版 有料版	学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみます。
モジュール2 自学自習を促す ICT 活用	無料版 有料版	学習者に自学自習を促すために ICT で何ができるのか、その手段を学び、実際に ICT を導入した授業設計ができるように学びます。
モジュール3 学びの場を作る（学びの場の提供）	無料版 有料版	学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。
モジュール4 学生を自己調整学習者に育てる	無料版 有料版	学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

アクセス数

2023 年 3 月から 2024 年 2 月までの間に、延べ 64 名（IP アドレス）がオンラインプログラムへアクセスしました。各モジュールへの訪問者数および無料版プログラムの学習を修了し、デジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数（IP アドレス）			無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数		
	2021	2022	2023	2021	2022	2023
モジュール 1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる	127	37	32	11 名	3 名	2 名
モジュール 2：自学自習を促す ICT 活用	68	18	15	11 名	3 名	2 名
モジュール 3：学びの場を作る（学びの場の提供）	45	15	8	12 名	3 名	2 名
モジュール 4：学生を自己調整学習者に育てる	60	13	9	12 名	3 名	2 名

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 自律学習支援編（第 3 期）の受講直後アンケート（修了者 2 名のうち 1 名（バッジ取得者のうち 50%））では、以下、1）～4）の設問に対する回答を求めました。

1）各モジュールの学習内容について、何か改善してほしい点があれば教えてください。

「様々なモデル（ID、ガニエの 9 事象）等があるもりだくさんであったので、もう少し細分化しても良いと思った」など、モジュール 4 の学習内容に関する回答が見られました。これらの意見を踏まえ、今後、学習内容の細分化について検討します。

2）学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習の進捗に役に立ちましたか？

回答者全員が「役に立った」と回答し、その理由として、「学習を進めるペースメーカーになりました」の回答を得ました。

3）オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか？

オンラインプログラムの印象について、ARCS モデルの各要素別に 1 ～ 7 段階で回答を求めました。

【A：注意】回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「今まであやふやだった知識が何であったかがわかった。また、どのようなことを学べばよいかがわかった」との回答を得ました。

【R：関連性】回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「力試しテストは難しかったが、「学習設計マニュアル」を勉強していくことで系統だって勉強できた」との回答を得ました。

【C：自信】回答者が肯定的な回答を行いましたが、他の項目に比べると、数値が高くありませんでした。その理由として、「教育改善に向けての方略に自身が持てたが、全てうまくできるかはまだ心配である」等の回答を得ました。

【S：満足感】回答者全員が肯定的な回答を行い、その理由として、「自分の時間を見つけて学習することが出来た。また、対面講義で義民点の改善に繋がられた」等の回答を得ました。

6 ヶ月後追跡調査の結果（有料版）

教育改善スキル修得オンラインプログラム自律学習支援編（第2期）の修了者を対象とした6 ヶ月後追跡調査（修了者3名のうち1名（バッジ取得者のうち33%）では、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか（記憶度）、また受講後の業務にどの程度役立っているか（有益度）についての回答を求めました。記憶度・有益度について、多くの受講者がモジュール1～5の項目で「覚えている」「少し覚えている」、「役立っている」、「少し役立っている」と回答し、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」という回答が過半数をこえた項目はありませんでした。

＜6 ヶ月後追跡調査結果概要（2023 年 9 月（第2期）実施分＞

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1 ヶ月と3 ヶ月の計画では、具体的なアクションを実行していたが、6 ヶ月では計画を実践できなかったと回答しました。1 ヶ月と3 ヶ月での成果について、「シラバスの作成を行っていたので、周囲の教員への説明を円滑に行うことができた」、「シラバスに基づき自律学習支援のためのフィジカルアセスメントの実践を各演習担当教員へ伝えるところまではでき、同意を得られたが、実際の授業内容の変容までには至らず。自分の担当部分の授業改善及び準備にとどまってしまった点から考えると、予定通りに行動はしたが、臨んだ成果は得られなかったという評価になると思う」との回答を得ました。6 ヶ月の計画を行動に移せなかった理由を見ると、「授業終了後次年度へ向けての、振り返り、評価、再設計をいまだに行えていない」のように、計画の進行遅れが原因との回答が見られました。一方で、また、オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、「はい」との回答を得られました。以下、アクションプランの実行状況と ID を活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その事例を紹介します。

表：6 ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果	周りからの反応
シラバスの記載が明確にし、オンラインで共同作業し、相互に学べる機会を作ったことで自ら学ぶという姿勢の教育（学校にしない教育）として取り組むようにした。定期試験を排除することはできなかったが、各演習ごとの課題やレポート点の比重を上げ、定期試験前に現在の点数を伝え、課題やレポートの再提出の機会を作り、どのように定期試験に臨むかを各個人が選択し学べるようにした。	自ら学ぶ学生はより学び楽しかったとのコメントを得られたが、意欲のない学生のやらしさが目立つ形となり、グループ内にやらない学生がいる場合（グループ学習自体には評点は与えず、その後の各自の学びに配点を与えていたが）不平不満がでた。	新しい取り組みであったため、一定の評価や賛同は得られたものの、分かりにくい煩雑との意見も見られた点を次年度までに改善していきたい。

共同利用拠点事業⑥

FD 活動デザイン編

本センターでは 2021 年から、
FD 活動の設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム-FD 活動デザイン編-」
を開発・公開しています。

本年度の取り組みの概要

表：参加者募集告知ページの閲覧状況（3 期）

	FD 編 3 期固定ページ			FD 編 3 期投稿ページ		
	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー	表示回数	総ユーザー	新規ユーザー
4 月	76	45	28	43	36	0
5 月	28	23	7	46	39	3
6 月	1	1	0	16	13	0
7 月	6	5	2	3	3	0
8 月	0	0	0	2	1	0
9 月	1	1	0	2	2	0
10 月	1	1	0	7	5	0
11 月	0	0	0	0	0	0
12 月	2	1	0	5	3	1
1 月	0	0	0	0	0	0
2 月	1	1	0	3	3	0
3 月	0	0	0	2	2	0
総計	116	75	37	129	103	4

履修証明プログラム第 3 弾として、FD 担当教職員向けの新たな講座「FD 活動デザイン編」の提供を開始しました。本プログラムは、令和 2 年度末に発出した「オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言」および「FD 活動の客観的な成果分析の枠組みについての提言」の内容を踏まえて、コロナ禍後を見据えたオンライン教育を定着・発展させることができる教職員の育成を試みています。令和 4 年に無料版を公開し、本年度は有料版第 2 期を募集し、1 名の方が修了されました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（FD 活動デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle3/>

🌐 日本語 (ja) ▼
ログイン

教育改善スキル修得オンラインプログラム (FD 活動デザイン編)
🔍

アナウンスメント
表示するニュースアイテムはありません。
||

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

▼

モジュール1：FDはこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）

モジュール1では、「問題提起：IDはFDの基礎になるか？」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。

アクセスする

アカウントなしで閲覧可能

▼

モジュール2：FD活動のKPI（評価指標）：FD活動をアピールするための7つの提案

FD活動のKPI（評価指標）として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。

アクセスする

* 要ログイン

モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案

年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演（反転授業型）」や「事前課題＋アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。

アクセスする

* 要ログイン

モジュール4：ラーニングコモンズの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案

モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。

アクセスする

* 要ログイン

📖 ナビゲーション

ホーム画面へ戻る

学習状況証明書を発行（無料ユーザー向け）
証明書はいつでも発行可能

学習状況証明書を発行（有料ユーザー向け）
有料ユーザーのみアクセス可能です。

📅 カレンダー

2023年 02月

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

図：FD 活動デザイン編のトップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができます。また、学習内容の確認を行うクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当研修の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当研修を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の研修を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1：FDはこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）	無料版 有料版	「問題提起：IDはFDの基礎になるか？」や「FDの義務化はどのように始まり何をもたらしたか」といった観点から、FDに関する5つの物語を学習します。
モジュール2：FD活動のKPI（評価指標）：FD活動をアピールするための7つの提案	無料版 有料版	FD活動のKPI（評価指標）として、どのようなデータを収集・評価すべきかについて学習します。
モジュール3：FD研修のバージョンアップ：年1回の講演会を超えるための7つの提案	無料版 有料版	年1回、イベント型で行うFD研修ではなく、「事前資料付講演（反転授業型）」や「事前課題＋アクションプラン作成」といったFD研修の7つのアイデアについて学習します。
モジュール4：ラーニングコミュニティの活動を設計する：授業以外の学習支援の7つの提案	無料版 有料版	モジュール4では授業以外の学習支援として、「チューター研修と認証」や「参考文献よりもジョブエイド」といった7つのアイデアについて学習します。

アクセス数

2023 年 3 月から 2024 年 2 月までの間に、延べ 100 名（IP アドレス）がオンラインプログラムへアクセスしました。各モジュールへの訪問者数および無料版プログラムの学習を修了し、デジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数（IP アドレス）		無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数	
	2022	2023	2022	2023
モジュール 1：FD はこのままでよいのか（大学のワンランクアップに向けて）	188	100	23 名	1 名
モジュール 2：FD 活動の KPI（評価指標）：FD 活動をアピールするための 7 つの提案	39	11	14 名	1 名
モジュール 3：FD 研修のバージョンアップ：年 1 回の講演会を超えるための 7 つの提案	38	13	19 名	2 名
モジュール 4：ラーニングコモンズの活動を設計する：授業以外の学習支援の 7 つの提案	37	13	18 名	1 名

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム FD 活動デザイン編（第 2 期）の 受講直後アンケート（修了者 1 名のうち 1 名（バッジ取得者のうち 100%）では、以下、1）～4）の設問に対する回答を求めました。

1) 各モジュールの学習内容について、何か改善してほしい点があれば教えてください。

「提示された改善案が提案 1 と提案 2 のどちらに基づいたものであるのか迷った記憶があります。この選択を間違えるとスコアが一気に下がってしまうため、適切か不適切かの判断よりも緊張してしまいました。適切な改善案がどの提案に基づいたものであるのかを問う問題と、改善案が適切か不適切かを問う問題を分離してはどうかと感じています」など、モジュール 2 の力試しテストに関する回答が見られました。また、「小テストのレビュー（フィードバック）について、正誤どちらでも表示してほしいと感じています（自分の考えとは違って正解していて、力試しで気付くことがあるため）」や、「各問について、自分の回答の意図を説明したいときがあります。自分でメモをしながら解いていたのですが、この段階で掲示板等にてシェアできると、面白いかもしれません。（他の人がこれから解くであろう）小テストについて語ってよいのか躊躇してしまいました。」など、各アイデアの小テストに関する回答を得ました。これらの意見を踏まえ、今後、力試しテストと小テストの構成に関する修正を検討します。

2) 学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習の進捗に役に立ちましたか？

回答者が「役に立った」と回答し、その理由として、「普段の業務に追われ、どうしても後回しになりがちだったのですが、意識を研修に向ける良いきっかけになりました」との回答を得ました。

3) オンラインプログラムについて、どのような印象を持ちましたか？

オンラインプログラムの印象について、ARCS モデルの各要素別に 1 ～ 7 段階で回答を求めました。

【A：注意】 回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「FD が取り扱う範囲の大きさに興味がわいたため。鈴木先生の紀行文（モジュール 1：FD がカバーする範囲はどこまでか）にあった「仕事を受けてから調べて学ぶ。学んだことを専門家のように伝える。一人の大学教員のデベロップメントにつながる体験でした。」という言葉が胸に響いたため」との回答を得ました。

【R：関連性】 回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「自身の FD 実施計画にすぐ反映できる知見が得られたため。これまで学んできた ID とのかかわりが具体的に示されていたため。」との回答を得ました。一方で、1 名の回答者からテストの難易度が高かったという意見もありました。

【C：自信】回答者が肯定的な回答を行いましたが、他の設問よりやや低い数値でした。その理由として「参加者が私一人であったため。山下さんには他参加者役を担っていただきましたが、やはり同じ立場の方が多く参加されていた方が、自分の強さも弱さも具体的に実感できるものと思います。」との回答を得ました。

【S：満足感】回答者が肯定的な回答を行い、その理由として、「自身の FD 講習の品質向上だけでなく、所属大学において FD を話題とする良いきっかけとなったため。」との回答を得ました。

6 ヶ月後追跡アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム FD 活動デザイン編（第 1 期）の修了者を対象とした 6 ヶ月後追跡調査（修了者 10 名のうち 4 名（バッジ取得者のうち 40%）では、オンラインプログラムの内容をどの程度覚えているか（記憶度）、また受講後の業務にどの程度役立っているか（有益度）についての回答を求めました。記憶度・有益度について、多くの受講者がモジュール 1～5 の項目で「よく覚えている」「少し覚えている」、「役立っている」、「少し役立っている」と回答し、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」という回答が過半数をこえた項目はありませんでした。

＜6 ヶ月後追跡調査結果概要（2023 年 7 月（第 1 期）実施分＞

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1 ヶ月と 3 ヶ月の計画では、4 名中 2 名が、6 ヶ月では 4 名中 1 名が計画通りに実行したと回答しました。計画の成果について、「書籍「学習設計マニュアル」を読む」という目標を立てましたが、本を読むことができたため」や「ITTPC のことを調査し分析するところまでは着手したが、課題の洗い出しまで行うことができませんでした。行動には移すことができました」、また「テストプログラムの実施と協力者の確保」、「テストプログラムの評価、外部教員の招聘、企画文書化」、「企画の学内承認。ホームページ立ち上げ」を実施したとの回答を得ました。一方で 1 ヶ月と 3 ヶ月の計画において、4 名中 2 名が、6 ヶ月では 4 名中 3 名が計画通りに実施できなかったと回答しました。その理由として、「組織の改組によって、FD 活動が停止しました（他の学内業務に専念しました）」や「人事異動の関係で、FD 担当者にはならなかったのですが、熊本大学大学院に合格し、学びを継続しているので、「No」という回答にはなりません」等、人事異動や組織改編のために担当から外れた事例や、「仕事に慣れつつでしたので、少しずつ基礎となる ID について学び、指導補助者向けの「困りごと解消」研修実施のための基盤を作っておりましたが、当初の予定より非常に遅れてのスタートとなりました」や「まだ受け始めたころは、仕事に慣れることで精一杯で、他のことをやる余裕がありませんでした」、「2023 年度 3 月に入り、新しい指導補助者の着任にあわせてオリエンテーションや研修を行いつつ、指導補助者の「困りごと解消」研修を月 1 回程度実施していく予定で、5 月からようやく実施できそうです。予定よりかはかなり遅れています」など、進捗が遅れていながらも実践しているという回答を得ました。更に、オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、「はい」と回答した受講者が 4 名中 1 名でした。以下、アクションプランの実行状況と ID を活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その事例を紹介します。

表：6 ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

改善内容	改善結果
他の組織への研修において、事前に資料提供・質問やコメント依頼・当日の研修では質問やコメントを軸に議論を展開する FD を基本とすることにした	準備を早く進める必要がありますが、フロアとの対話が活発になり、そのことで私自身学ぶことの多い FD を実現することができると感じています。

一方で、オンラインプログラムで学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだかについて、「いいえ」と回答した受講者が4名中3名でした。その理由として、「人事異動に伴い、研修担当ではなくなったため」や「まだ東京通信大学に助手として着任したばかりで、まだ研修や教育の実施側にはたどり着けておらず、オンラインプログラムで学んだことを活かしているとは言い難い状態です」との回答を得ました。一方で、「ただ、助手として指導補助者に対するオリエンや研修は2023年3月から任せられており、そちらで学んだことを活かしつつ、「困りごと解消」研修や、その他教育補助のための研修に活かしたいと考えています」との回答もあり、計画通りの進行ではなくとも、その他の部分でもオンラインプログラムで学習した内容が活かされているようです。

共同利用拠点事業⑦ ラーニングテクノロジー ワークショップ

本センターでは 2021 年から、
ラーニングテクノロジーについて学習するワークショップを
実施しています。

本年度の取り組みの概要

本取り組みでは、教育のオンライン実施がコモディティ化したことを土台として、従前の教育形態では実現できなかった教育や FD を実現するためのラーニングテクノロジー（人工知能技術やラーニングアナリティクス等）活用方法を実習形式で学ぶことのできるワークショップを大学教員向けに実施しました。

具体的には、国内で最も利用されている LMS である Moodle の最新動向、分析等に活用できる Jupyter Notebook、生成 AI（GPT）を用いた教育実践など、近年、高等教育で利用され始めている技術について学習する講習会やワークショップを実施しました。

2023 年度：ワークショップ一覧

以下のワークショップを開催しました。Zoom によるオンライン開催にて、全国から多くの教員・職員等が参加しました。

表：2023 年度ワークショップ一覧

日時	タイトル	概要	参加人数
2023 年 7 月 22 日 13:30 - 15:30	Moodle & Mahara ワークショップ（講演）	令和 6 年度新設の共創工学部における学修ポートフォリオに関して、Moodle や Mahara 等の活用事例を紹介した。後半では、共創工学部における学修ポートフォリオの効果的な活用方法に関するディスカッションや情報交換会（会場のみ）を行った。 場所：お茶の水女子大学附属図書館内プレゼンテーションルーム https://mdqu.rcis.jp/course/view.php?id=25	24 名（現地 12 名、オンライン 12 名）
2023 年 8 月 26 日（土） 14:00 - 15:30	GSIS-LT 連続 WS（第 5 回）「GPT でオンライン学習教材を自動生成する」	このワークショップでは、OpenAI の GPT を用いて、様々なトピックのオンライン教材の文章（説明文や小テスト問題）を生成し、それを元に教材原稿を試作します。またその原稿を Moodle（オープンソースのオンライン学習システム）の「ページ」や「小テスト」として利用できるフォーマットに変換することも GPT を用いて試します。Jupyter Notebook 上の python で GPT API を用いて行います。（ChatGPT だけを用いても、ある程度、同様のことはできます。）	ハンズオン参加：19 人 聴講参加：59 人

		開催方法： Zoom 主催：熊本大学 大学院 教授システム学専攻／教授システム学教育実践力開発拠点 共催：JSET SIG-AI（人工知能の教育利用） タイムテーブル： 14:00-14:05 冒頭説明 14:05-14:40 GPT API を用いた教材原稿の試作 14:40-15:10 GPT API での Moodle 用データの生成 15:10-15:30 質問対応など	
2023 年 10 月 29 日 (日) 10:30 - 12:00	GSIS-LT 連続 WS(第 6 回)「GPT でオンライン学習教材を自動生成する」その 2	このオンラインワークショップでは、紙の書籍をスキャンした画像を Google ドライブ内で開くことで文字に変換したり、講義動画の音声から OpenAI Whisper を用いて字幕を作ったりして、文字データを作成することを実習します。また、それらの文章を GPT のプロンプトに入力し、文章に書いてあることについて問う小テスト問題（選択問題、穴埋め問題など）を自動生成します。またその原稿を Moodle（オープンソースのオンライン学習システム）の「小テスト」として利用できるフォーマットに変換することも GPT を用いて試します。Jupyter Notebook 上の python で GPT API を用いて行います。ChatGPT や Bing AI Chat を用いて行う場合も、ある程度は同様の生成ができることも試します。 開催方法： Zoom 主催：熊本大学 大学院 教授システム学専攻／教授システム学教育実践力開発拠点	ハンズオン参加：13 人 聴講参加：62 人

		共催：JSET SIG-AI（人工知能の教育利用） タイムテーブル： 10:30-10:35 冒頭説明 10:35-11:00 Google ドライブや Whisper によるスキャンデータや音声データの文字起こし 11:00-11:20 GPT API を用いた教材の原稿の生成 11:20-11:40 GPT API での Moodle 用データの生成 11:40-12:00 質問対応など	
--	--	--	--

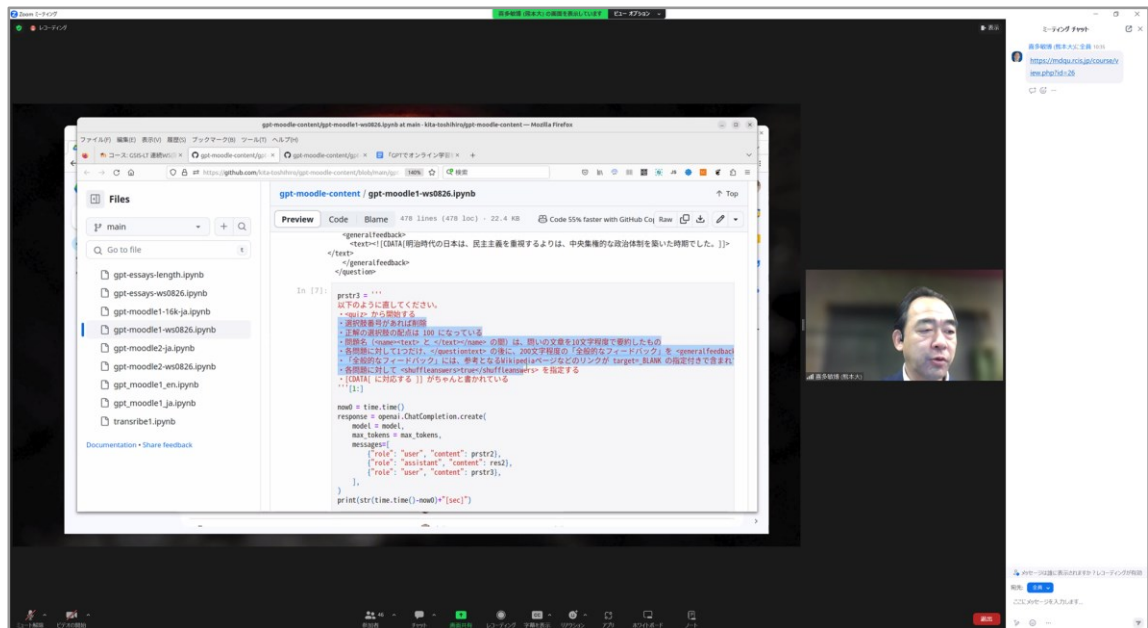
セミナーの資料は、セミナーの題材でもあるオープンソースの学習管理システムである Moodle を活用して、公開・共有しました。

The screenshot shows a Moodle course interface. The top navigation bar includes a menu icon, the course ID 'mdqu', the language '日本語 (ja)', and a login link '[ゲスト閲覧] (ログイン)'. The left sidebar contains a list of course sections: 'ws2023-1029', '一般', '(前準備) Google Colab を使う準備をする', 'Moodleとは', '自動採点の小テスト', 'GPTを利用して説明文や小テストデータを自動作成する', '参考情報', 'Moodle開発本部が公開したコース', '(PR) 熊本大学 大学院 教授システム学専攻 学生募集', 'Home', and 'カレンダー'. The main content area displays the course title 'GSIS-LT 連続WS(第5回,第6回)「GPTでオンライン学習教材を自動生成する」' with a breadcrumb 'Home / コース / ws2023-1029'. Below the title, it states '熊本大学 大学院 教授システム学専攻 教授 喜多敏博' and 'この資料は mdqu.rcis.jp にあります' next to a QR code. A paragraph describes the workshop as a collaboration between Kumamoto University and JSET SIG-AI. At the bottom, a yellow banner promotes 'Google Colaboratory (Google Colab)の使い方' with the text 'PCへのインストール不要!! Pythonの実行環境準備' and '現役女性エンジニアが教える やさしい機械学習'.

図：ワークショップ資料はオンラインで一般公開されている（１）



図：ワークショップ資料はオンラインで一般公開されている（２）



図：GSIS-LT 連続 WS(第 6 回) 「GPT でオンライン学習教材を自動生成する」その 2 の様子

Zoom 開催にて、全国から参加可能なため、より多くの見込受講者にリーチすべく、Facebook ページの投稿機能を活用して、PR に務めた。



図：セミナーをPRするFacebook ページへの投稿

実践事例集の公開

本取り組みとして実施したワークショップ・研究会で提供した学習コンテンツや資料は、基本的に Moodle 上で誰でもアクセスできるように「実践事例集」として公開されています。

教育支援ツール活用のための実践事例集

ダッシュボード / コース / 2021_moodle活用 / Moodle

[事例一覧](#)
[Moodle](#)
[Zoom](#)
[全体](#)

本ページでは2021年度に熊本大学教授システム学研究センターが提供したワークショップを元に、MoodleやZoomといったICTツールの活用に役立つような情報を掲載しています。興味があるものをご利用ください。

Moodle編

自動採点テストで独習させたい【Moodle】

小テストの設定方法やランダム化について解説しています。

サンプル有

アクセスする

学生相互のやりとりで学習させたい【Moodle】

提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。

アクセスする

学生の状況をモニターしたい【Moodle】

学生の出席（Moodleコースに入ったか）を確認する方法等について解説しています

アクセスする

Zoom編

Zoom講義中に問いかけて反応を見たい【Zoom】

提出物が全員に見えるようにし、相互にコメントを書かせる方法等について解説しています。

アクセスする

ラーニングテクノロジストの育成



教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- 教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム
- 教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細

Moodleの利用方法をもっと知る



以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- 熊本大学：eラーニング推進室
- Moodle公式ドキュメント

図：教育支援ツール活用のための実践事例集

各トピックの説明ページ例は下図の通りです。小テストの種類や作成方法といった一般的な情報だけでなく、「毎回違う問題を出題したい」や「複数の小テストの総合点を出したい」等、より高度な設定についても説明をしています。

さらに、自組織の Moodle ヘリストア（ファイルをアップロード）するだけで、設定済みの小テストを入れることができるサンプルをいくつか提供することで、自力での設定が困難な人でも機能を活用できる仕組みを提供しています。

また、ツールの活用方法に関する説明だけでなく、本センターがこれまでに提供してきた教育改善スキル修得オンラインプログラムで紹介されている学習コンテンツ等、機能と関連する、学習設計の観点からも役立つような情報も参考情報として掲載しています。

教育支援ツール活用のための実践事例集

ダッシュボード / コース / 2021_moodle活用 / 学習活動設定編

事例一覧 学習活動設定編 学習活動評価編 全体

自動採点テストで独習させたい【Moodle】

概要
Moodleでは、「クイズ」機能を利用して、知識やスキルを習得できるまで、学習者に練習をしてもらうことができます。以下にクイズの形式の説明、サンプルを掲載していますので、ご利用ください。

小テストの種類や作成方法：

- 小テストを作成する（作成方法や種類に関する説明）
- 問題のタイプの一覧
- ドラッグ&ドロップテキスト
- 穴埋め問題（Cloze）

小テストと関連する設定：

- 小テストの設定「レビューオプション」（学生からの見え方を確認したい）
- 小テストでランダムに出題（毎回、違う問題を出題したい）
- 評定計算（複数の小テストの総合点を出したい）

いくつかの小テストなどの点数を重み付けて、総合点を出すには⇒「評定」の評定項目に「計算」を使うのが分かりやすい。自由に計算式を書いて、総合点に対する配点（重み付け）の調整ができる。

サンプル：自身のMoodleヘリストア（挿入）できます。リストア方法はこちら

- Moodle小テスト：多肢選択式
- Moodle小テスト：ドラッグ&ドロップテキスト
- Moodle小テスト：穴埋め問題
- Moodle小テスト：O×問題

実用イメージと参考情報
クイズ機能を利用することで、例えば、「（１）授業の前にLMS上で学習し、クイズに合格することを授業参加のための条件とする」や「（２）3回の授業ごとにテストを行い、授業についていけない学習者をフォローする」といった利用方法が考えられます。詳しくは以下のリンクをご参照ください。

【参考】教育改善スキル修得オンラインプログラム「科目デザイン編」モジュール3
このプログラムでは、何度でもテストにチャレンジできる「再チャレンジ可」や、授業を学習目標ごとにブロック化するかし、ブロックごとに学習目標の達成をチェックする「多段階評価」を提案しています。

ラーニングテクノロジストの育成



教授システム学専攻は2022年度より、ラーニングテクノロジストを育成するカリキュラム（博士前期課程）を提供します。詳しくは以下のリンク先でご確認ください。

- 教授システム学専攻：博士前期課程カリキュラム
- 教授システム学専攻：ラーニングテクノロジスト詳細

Moodleの利用方法をもっと知る



以下のサイトでは、このページで紹介しているMoodleの利用方法について、より詳細に情報を掲載しています。

- 熊本大学：eラーニング推進室
- Moodle公式ドキュメント

図：教育支援ツール活用のための実践事例集
例：自動採点小テストで独習させたい



図: Jupyter Notebook事例

mdqu

日本語 (ja)

[ゲスト閲覧] (ログイン)

GSIS-LT 連続WS(第5回,第6回)「GPTでオンライン学習教材を自動生成する」

Home / コース / ws2023-1029

熊本大学 大学院 教授システム学専攻 教授 喜多敏博

この資料は `mdqu.rcis.jp` にあります



本ワークショップは、
熊本大学 大学院 教授システム学専攻 <https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>
熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構 教授システム学教育実践力開発拠点 <https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/sharing-hub/>
JSET SIG-AI (人工知能の教育利用) <https://www.jset.gr.jp/sig/sig-ai/>
の共催イベントです。

(前準備) Google Colab を使う準備をする

図 GPT による教材生成の事例

2024 年 3 月 31 日

コンテンツ制作：

熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構 教授システム学教育実践力開発拠点

監修者：

喜多敏博（半導体・デジタル研究教育機構 教授）

編集担当者：

山下藍（半導体・デジタル研究教育機構 特定事業研究員）

鈴木真保（大学院教授システム学専攻博士後期課程・
教授システム学教育実践力開発拠点連携研究員）

篠塚麻衣子（半導体・デジタル研究教育機構 特定事業研究員）